
鳶渡の時

春日戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳶渡の時

【Zマーク】

Z7051W

【作者名】

春日戸

【あらすじ】

一人に対して一度だけ使用できる力、鳶渡^{とびと}。それは使用者が対象の過去へ飛び、過去の改変をすることで、現在に時間の逆説を生む奇妙な力のこと。この物語は、過去無しと呼ばれる者、鳶渡を使う者、「無代トキ」の一页。

カーンカンカンカン

鉄筋の音が響く、工業地帯。空は灰色に染まつていて、深呼吸でもしようものなら噎せ返ることが約束される。そんな空氣の汚染された場所。現代では、こんなとこりでも、高層マンションもあればスーパー やコンビニもある。

その中でも一等古ぼけたアパートがあつた。周囲の雑草は育ちに育ち、ゴミは散乱し荒れ放題。玄関扉のベニア板は削げ返り、インター ホンは潰れて使い物にならないほど。蜘蛛の巣はあちらこちらに張つてある。大家も諦めがついているのか、10部屋あるうちの6部屋は空き部屋となつてている悲惨な状態。遠目から見ても、近寄り難いアパートである。

しかし、そこに足を運ぼうとするものが居た。

不釣合いな高級スーツを纏うサラリーマン風の男。程よく茶の混じつた髪に、剛健な気風の顔立ち。田や口元にはシワが蔓延つている。齡は52を刻む。

「……ここか」

男は呟くと、アパートを前にして生睡を飲んだ。見据える先は105号室。一度このアパートの中央部だ。枷の付いた足を持ち上げるが如く、重く重く歩いてゆく。

105号室を前にして、男の鼻孔を煙草の匂いが刺激する。恐る恐る扉を叩く。

ノンノン

「……」

奥から返事はない。男はもう一度腕を振る。

コンコンコン

「はいよ。勝手にはいってくんなせ」

借主は迎えもせずに、扉の奥から進めてきた。透き通つたビタミンの中間に位置するような、特徴的な声だった。それは若くも無く年老いたようでもない、不思議な声。

「……」

男は無言のままドアノブを回転させた。中に入ると、白い靄で埋め尽くされていた。煙草だ。

男は噎せ返る。

奥の和室で胡坐を組みつつ煙草を咥えている男は、それに気づいた。

「おつと、あんたは吸わない性質か。悪いね、今窓を開けるよ」
座に構えながら少し無理な体勢で後ろに仰け反りつつ、カラカラカラと窓が開くと、煙は群がつて出て行つた。
ようやく視界が晴れた。

男の眼に映るのは、茶か金か、どちらにも見える明るい髪に、黒い瞳の三白眼。顎には少しだけ黒の髭がある、20代半ばの男。黒無地の長袖Tシャツに薄い色のジーパンを着ている姿は、単なる一般人と見て何ら疑問は沸かない。

「上がつても……」

男が言つと、煙の男はコクリと頷いた。

靴を脱ぎ、木の床に足を踏み入れ、少し歩いて置みの上に着く。

中は6畳半ほど。襖や、白だつたはずの壁模様はヤード黄ばんでいた。田に付くものは小さなテレビ。そして古いラジカセ。最近の機器はなく、強いてあげるならば携帯くらいだった。

「まあ、座んなよ」

煙の男は座布団を自分の対面上に投げた。

「あんたが、無代トキ（むだい とき）か」

男は言い、腰を下ろす。

トキと呼ばれた煙の男は煙草を一吸いし、口を開く。

「ええ。やうひなじむわん…？」

男は正座し、丸めた拳を大腿に置いて頭を下げた。

「…私は富路（みやじ）博信（ひろのぶ）と申す。察しはしているだらうが、頼み事がある」

トキはその堅苦しい姿にため息を漏らす。

「やうひ堅くモノをつくらんで下さい。気軽にいきましょうや」

「…娘の命が掛かっているんだ。気軽にいけるわけがない」

富路は冷静に言つたが、苛立ちを抑えていたのが伺えた。

「いや、まあ、それは分からんでもないですが、富路さんも相当切羽詰つているだらう。ここくらいでは肩の荷を解いちやくれませんか」

トキが諭すように言つと、富路は重く口を開いた。

「鳶渡（ひびと）…といつもの…本物なのか」

「どう思います?」

トキが遊ぶように返すと、富路は下っていた頭を上げ、眼を効か

せる。

「本物であつて欲しい……！ とにかく願うまでだ」

「まあ、それはそうでしょう。恐らく、その娘さんに八方手を頼んでお見受けしますし」

穏当な眼をしているトキに、富路の頭はまた畳みに向かつた。

「娘の… 美登理は、今、意識不明の重体で…どの医者からも、救うのは困窮を極めると…」

「…最初に言つておきますが、鳶渡も100じやな」

「それでも… 可能性はあると耳に入れた！」

静かに流れていた場の空気が、富路の渴のよつな言葉で加速した。ピリピリとした其は、余裕の無さから来る、焦燥であった。

トキは眼を瞑り、立ち上がった。ふう…と新しい煙が漂う。

「向かいましょうか。話は移動しながら… ところが」希望でしょう

トキは乗り気ではないものの、事情を酌んだ。富路も立ち上がり、足早に玄関に向かいながら言つ。

「外に車を待たせてある」

外に出ると、富路の言つた通り、車が佇んでいた。超高級車のベンツだ。何時瀆れてもおかしくないボロアパートの前にベンツが止まっている光景は、トキの口の端を嫌に持ち上げる。

「不釣合いだなあ

両名は後部座席に乗車した。

発進。滑らかに移動するベンツは、氷の上でも走っているのではないかという錯覚を覚える。

景色は流れていく。電柱を数えるのがバカらしい距離の間、富路は沈黙していた。両手を握り、足は早いリズムを刻むように一定に動く。

トキは横目でその姿を見て、鼻で息を吐ぐ。

「……重体の美登理さんは……どのよつた経緯でその状態に？」

問いかに、富路の動きはピタリと静止する。それから重く口を開く。

「……事故だ」
「それはいつ頃」
「おととこの……毎週……」
「娘さんは被害者ですか？」
「…単独だ」
「…ですか」

それだけを訊くと、トキは口を閉じた。富路は前を回り、切り出した。

「依頼料は……いくら……」

トキは横田でチラリと富路を見てから、後頭部を一掻きした。

「……薦渡は信憑性の無いモノですし、成功報酬といつ形で頂戴する」とになりますが、まあ、そちらの提示額を聞いてみますかね」

「2千万。またはその倍。それでもダメならその倍は出や

「それでもダメなら?」

試すように問いかける。

「倍、出やつ」

しかし、答えは躊躇の一歩も無く返ってきた。

「…一億六千万を迷いなく出せるとは…なかなかに出来ることがない。いや、まあ、富路さんが金に困っていないから、ところのを考慮するとそういうでもないですが」トキは素直に感心して言つた。

「…いくらでも積む覚悟でいる。私は…父親らしいことを美登理に何もしてやれなかつた。家族の時間は放つて仕事に注ぎこんだ結果といつのは承知だ。ただ、今までの私は、金に困らせないことが、大黒柱である父親の役目だと思つていた」

富路は嘔むように言つ。

「だが、それでもないようだな…」

何らかの躊躇が見え隠れする物言いに、トキは不信感を抱いた。

「…まあ、娘は愚か嫁さんもない俺には、少し分かりかないですけど、時間は隔てなく使わなくては、バランスが取れないのは事実」

「…バランス?」

富路が眉を曲げながら鸚鵡返しをすると、トキは含んだ笑みを見せ、指を一本立てた。

「ええ。背負うモノによって必要な間隔というものがあるんですよ。睡眠やら食事やら趣味やら仕事やら家族やら。配分を間違えると忽

ちバランスを失い、太い箸の時間の枠から出でてしまつ。大抵は睡眠が被害を食うんですけど、それは己の時間だ。まだ引き戻しは容易い。でも、仕事や家族はそうは言つてられない。調整が思うように出来ない、下り合いがつかない。枠から外れると、そのまま延々と…と言つのも珍しくない」

トキの話に、富路は乾いた表情をさせた。

「…私はそれに該当するんだな」

「ハハ、でも案外、気づけば努力次第でまた軌道に乗つかれるものですよ。今回はその第一歩ですな」

朗らかに言つトキに、富路は憔悴した顔をし、自らの手を見つめながら「そうだと…いいんだがな」と囁いた。

そうすると、ドライバーが「着きました」と一言放つた。

既にベンツは病院の正面玄関のロータリーにまで進入していた。規模の大きな病院のフロントを見て、トキは後頭部を一搔きする。バンシッとドアが勢いよく閉まる音が響く。富路は忙しなく自動ドアに駆けて行く。一步遅れてトキも車から降り、追従する。

両名はエレベーターに乗り、富路 美登理が入院している病室、505号室に向かう。富路は悠長に昇つていくエレベーターすら待ちきれない様子だった。

ガラガラガラ

富路は個室である505号室の扉を開いた。中には大きなベッドで生命維持装置に繋げられている人間が居た。まつ毛の長さや輪郭、

体格からして女性だ。一般と異なるとすれば、髪がない事。頭部にいくつモノ縫い目があることだ。そして人工呼吸器や循環器、栄養を送る数々のチューブが幾つにも渡り身体に通されている。もしもベッドではなく、分娩台であつたならば、その姿はサイボーグでも作っているのではないかと思える。

ピ、ピ、ピ

静けさしかない室内には、終始、電子音が響いていた。

「…酷い状態だな」

トキは言った。そして納得する。

何故、富路が冷静を装っていたのに何でも無いところで怒ったのか。惜しげもなく大金を積むと言つたのか。それは血縁であり、娘である人物が、このような状態であることが許せないのだ。荒い言い方をすれば、この状態は異質なのだ。正常ではない。本来あるべき人間の姿ではないのだ。

「…耳から…脳がはみ出でていたらしい。損傷が酷く、手のつけようも無いらしい。奇跡的に快復しても、言語や手先は愚か、腕や脚も稼動できないと…」

現実に、目の前にいる憐れな姿の娘を見据えつつ、富路は歯を噛み締めた。

だからこそ、鳶渡を頼つた。

そういう意味が、トキにひしりと伝わる。

トキは右手を握り締めながら富路に言ひ。

「鳶渡というモノが、何のかは承知の上でしょ？」

「…過去に行き、未来を改竄する…といつことは…」

信じ難いが頑迷なままでは居られないといつ富路の表情と答えて、
トキはふつと笑みを浮かべた。

「まあ、そんなモンです。鳶渡は対象の記憶を辿り、過去に飛び、
未来を捻じ曲げることが出来る力のことです。それと、この力は一
人に対し一度きりといつことを覚えておいてください」

「一度きり？　といつことは、もしもまた、美登理がこの状態にな
つたとしたら…」

「ええ、その時は…鳶渡は頼りにならず、自力で…といつ」と
富路はベッドに居る娘を静観する。そして目を閉じ、静かにゆつ
くじと開き、トキと視線を交わす。

「……だが、それで「今」が救えるのなら、それに頼るしかない」

真っ直ぐな言葉に、トキもまた目を閉じた。そして視線を切つて、
指を一本立てた。

「それともう一つ、先程申したよつに、記憶を辿らなければならな
い。鳶螺…と云われる道を先に通す必要があるんですが……」

「どびらー…」

「ええ、まあ簡単に言えば、現在と過去の糸電話の糸を繋ぐことで
す。これが通らなければ鳶渡は使えない。本来なら過想といつ…、
本人に改变したい過去の記憶を脳で呼び起こして貰い、繫ぐんです

が、今の美登理さんにはそれが出来ない」

説明に、富路の喉が「ゴクリ」という音を鳴らした。それは、つまり現段階では不可能という意味なのか。という疑問の音だ。

「なので、探理を入れても結構でしょうか」

「…ちぐり?」

「ええ、簡単に言えば、勝手に記憶を覗き込む行為ですな。でも口は、まあ…なんと/orか奥の手といつか…」

「…?」

はつきりとしない、どいか余所余所しさを感じる物言いに、富路は訝しげな表情をする。

トキは、んーっといつ濁声に似た音を喉で鳴らす。
「いえね、鳶渡使いの中でもモラルといつものがありまして…。勝手に記憶を覗くのは…その…、プライバシーの侵害とかなんとかに…」

富路の田尻が動く。

「今はそんな事を気にしている場合じゃないだらうー。」

「ええ、はい。分かつてます…一応…一応」

当然のように立腹し、大音声を浴びせられ、トキは困った表情になつた。苦笑いを織り交ぜつつ、突如、キッと眉が尖る。
「じゃ、行きましょ/うかね」

「…」

トキは右手を美登理の頭部に近づける。

「おい！ 美登理は脳に損傷があるんだぞ！」

富路は慌ててトキの肩を乱暴に掴み、行動を抑止する。

今の美登理の脳は、乱暴に扱うとその場で機能停止し、絶命してもおかしくない状態。富路の歯止めは必然的なものだ。

「…その辺は考慮して、そつと触れます。この頭に触れるといふ行為を容認してくれなければ、鳶渡は買えませんよ」

「……ッ」

顔面蒼白で富路はトキを睨み据える。しかし、少し経つと視線を美登理に移し、トキから距離を取つて暗に了解する。

「なあに、直ぐに済みますよ」

そうして、トキは腫れ物に触れるが如く、微細な音も無く、美登理の頭部に手を当てた。なんとも、ブツブツとした手触りだ。トキは思つが、直ぐに忘れる。

目を瞑り、手の平ではなく、その奥。名状し難い圧のようなモノに、神経を注いでいく。

「…ん」

そうすることで、美登理の記憶が脳の裏で超高速の巻き戻し映像として再生される。それはスライドショーが瞬く間に繰り広げられている感覚だ。その情報量は言つなづらば津波。トキはその中から、目的地を探し出す。

「…」

トキが呟いた。と、同時に異変が起きた。

「なつ…」

富路は絶句した。

トキの周りが突如としてコラッとブレた。途端に、身体や身に纏

う衣類全てが蒸発したかのように、微粒子となつた。

到底信じ難い光景。血肉の詰まつてゐる人間に起きてはならない現象。それが宮路の眼前で静かに起こつてゐる。

呆然としている間に、トキだつた粒子は美登理の頭の中に吸い込まれていつた。

「…」これが…鳶渡…

宮路の脚は、恐怖に震えていた。

鳶螺

「ここは所謂4次元の世界。暗い暗い筒状の至るところを、超高速で人の顔や多様なモノや建物や空や雨や太陽や月が駆け巡っている。これらは全て美登理の経験。過去のこと。鳶螺はそれが全て詰まっている摩訶不思議な空間。

この世界に介入するには肉体を粒子化させなければならず、それは通常の人間に置いて負荷が甚大なモノである。

人の中にあるこの時間軸の鳶螺は、粒子の介入に置いて抗体を作り。通常、介入の余地がない空間であるがために、侵入は一度きりしか許されない。

鳶螺の中、粒子化したトキの身体は、元に戻っていた。そしてその肉体を七色の光が渦を巻くように覆つていた。

「二日前だと楽でいいなあ」

トキは記憶世界を、気楽にリラックスした状態で浮遊している。本来、現在と過去の時間差が大きければ大きいほど鳶人（とびびと・鳶渡を使う者）に掛かる負荷は増大していく。抗体を作り始めた鳶螺は、無作法に侵入者の肉体を千切るが如く捻じ曲げ始めるのだ。そのため長い時間を飛ぶことは鳶人からすれば死の恐れが増していく危険なものである。

鳶螺は一つの抜け道。人の時間枠を通り、鳶人は現実世界とリンクする。そうすることで過去の改変を行なえる。

程なくして、トキの眼前に光が差し込んだ。

「ん。もう着いたか」

スッと目を閉じる。瞼の裏側が照らされる。

眩しさが消えた頃合に、トキは目を開いた。一番に田に飛び込んできたのは、張り巡らされたフェンスだった。その奥には雨でも降りそうな灰色の空と、俯瞰景色が広がっていた。

「…屋上…か」

「王立ちのまま右見左見する。同じ背の高さのビルがチラホラと目に入る。4・5階建てだ。つまり今現在、地に足を着いている場所はそれほど高い建物ではないことが分かる。

少し前に踏み込み、下を眺める。どうやら坂の上に建てられているようだ。そして、それらの景色の中に、ポツポツと黒子のよう、コンパスを用いて割り貫き、黒の絵の具を流し込んだような、黒い円の溝が点在していた。

「黒穴の連中、暇そぞこしてんなあ」

嫌そうな笑みを交えながら愚痴を吐き、トキはポケットから煙草を取り出し火を付けて、一服し出した。

尻を地面に着き、胡坐を組み、後ろに持つていった片手を地面について、空を見つづ、すぐに消える雲を作り出す。

「太陽の位置からして、正午か…ちょっと過ぎかな。……ちと予定より遅れたか」

カシャン

安寧な空気を漂わせていた中に、フェンスの音が入る。

「ん

後方からのようで、トキは上半身を支える腕を軸に身体を捻った。風かと思いきや、そこには女の子が立っていた。トキは煙草を一吸いし、吐き出す。

「……」

よく見れば、その女の子は学校の制服であらう紺のブレザー、中にカッターシャツとネクタイ、そして紺色のスカートを着用していた。ああ、ここは学校の屋上か。とトキは勘織る。

フーンスを驚愕むように握っている女の子は、不審人物を発見したような、軽蔑の目を向けていた。

「あんた……誰？」

質問に對して、トキは数秒停止してから、女の子の足元を見る。靴は履いている。そして全体を見る。後ろ髪が首元まで伸びている分を除けば、ショートヘアの黒髪に、パッチリとした眼、すつきりとした鼻、程よく血の通っている脣。傍目から見ても中々に可憐な子だった。身体付きも、細くもなく太くもなく、平均的なスタイルだ。

ただ、不可解なのは、身体の前にフーンスがあることだ。女の子の立っている場所は、フーンスの外側であり、屋上の淵だった。

「……」

確認したトキはゆっくりと捻っていた身体を元に戻し、ヒクッと片頬を持ち上げ、「シズクの野郎……」と呟つ。そして煙草の先を地面に擦りつけて火を消し、立ち上がる。

「あー……俺は……まあ、無代つていう。そりゃさんは……何をしようつて腹だ？」

「そんなのあんたに関係ないでしょ。強いて説明するなら、私は鳥だから飛び立つってだけよ」

キックと眉を尖らせ、挑戦的な態度で素つ頓狂なことを抜かす女子に、トキは参った顔をし、「そうか、分かった……そんじゃ……」と、あつたり片手を上げ、屋上の出入り口へ向かう。

と、その前に、トキは気づいたように小首を上げて女の子に訊く。「あー…鳥子さんよ。一ついいか？ 富路 美登理っていう子、知らなか？」

鳥子と得手勝手にトキに名付けられた女の子は、口を尖らせ、不機嫌そうな顔をしてこいつ言つた。

「私が…その富路 美登理だけど…」

トキは振り向き、「…へえ… そなのか」と疲れた顔で囁いた。美登理の表情は疑惑に埋め尽くされていく。

「なんで…私の名前を知ってるわけ？」

不信な田は混乱しているように見えて、冷静さを欠かさないようにも見える。美登理の一歩引いたような様子を見したトキは、おもむろにポケットから煙草を取り出した。そして銜えた一本に火を点けつつ、「それは…、お前んとこの親父さんに依頼されたからだよ」と告げる。

ジッジッという音が止み、煙が風に靡く。

「お父さんに…？ なんて？」

「……娘を助けてくれと」

小さな反応しか見せなかつた美登理だが、この時ばかりは驚きの表情をさせた。

「助けてって…どういっ…」「

意味が分からぬ。そう言ひたげだつた。

トキは煙草を吹かす。

「信じる信じないかは置いといて、聴くだけ聴いてみるか？」

美登理は頬に一筋の汗を垂らし、コクリと小さく頷いた。それに応えるように、トキは二本の指の間に煙草を挟んで口から離し、煙と共に声を出した。

「…簡単に言つ。俺は鳶渡つていう力を使って、今から一日後の末

来から来たんだ。まあ、タイム・スリップと捉えて貰つて構わない。
：「そんで、二日後の未来のお前さんは意識不明の重体で、助かる見
込みがほぼないらしい」

美登理の表情は、話が進むにつれて冷めたようなモノになつた。
トキはその変化は当然の反応。と存知していた。：「が。

「ふーん…なるほどね。それで未来からやってきて、過去の私を助
けることでタイムパラドックスを起こそうって？」

美登理はフエンスを驚愕んだまま、冷徹なまでに真っ直ぐトキを
見つめ、そう放つた。

「……！」

トキが静止した。挟んでいた煙草がバランスを少し崩す。

「驚いたな。その通りだ。しかし、やけに物分りが良いな」

大概の場合、このような突飛な話を真に受ける、鶴呑みにする者などいない。ほとんどが含んだ笑みを見せるか、バカにしているのかと憤慨する。しかし、美登理は違った。一瞬の内に享受した。

美登理はスカートのポケットを弄つて、チャリツと音のするモノを取り出した。

「こここの屋上はね、内も外も錠を掛けることが出来るの。正し、鍵を使わなくちゃいけない。この学校には屋上の鍵は2つしかない。一本は私がくすねたコレ。もう一本は多分職員室にあるんだろうけど、あんたみたいな不審者が学校に侵入して職員室まで行って鍵を取り、この屋上に入つて来られるなんて思わない。絶対にその前にとつ捕まるのがオチ。でもあんたはここにいる。どうやってか、それは未来から来たつて話で筋が通るわ」

美登理の理屈を訊き、トキは汗を一筋垂らしつつ、顔を後ろに逸らし屋上の扉を見る。重厚そうな鉄扉は枠にキチンと納まっていた。完璧に閉じている状態だ。

(つまり…こいつが対象じゃなかつたら、俺はアウトだつたのか)

あぶねーっと小声で呟いてから、美登理に視点を当てる。

(……異質なモノに対する享受。いりや…相当だな) 考え、ボリボリと後頭部を搔く。

「それで？」

美登理が気味の悪い笑みで進めた。トキは「ん？」と何に対しても分からず、眉を曲げる。

「私はいくらだつた？」

酷く尖鋭な声だった。ピリピリとした空気が通る。

下手なことは言えない、そんな中だつたが、「さあ?」と、トキはあつけらかんとした態度で返答した。ピクリと美登理の目尻が動く。

「さあつて、あんた依頼されたつて…。いくらかぐらい、アイツなら訊くでしょ」

「まあ、訊いてきたのは事実だが……、いくらでも出すつづってたし、正確な数字は出てないからな」

美登理にまた、不信の念が宿る。驚愕んでいる手に力が籠つたのが、フェンスがカリリッと嫌な音を立てた。そして表情が一変する。恨み・憎しみが募り、奥歯が噛み締められ、憤怒の形相へと変化を遂げた。

「金のために家族を見放す男が！ そんな氣前の良いこと言つわけないじやない！！」

大気が揺れたと錯覚を覚えるほどの怒号が放たれた。トキはその様子に何ら変わらぬ素振りで煙草を吸い、「んなこと言われてもな…」と言い、対応に困った顔をする。尻目に、美登理はそのまま続ける。

「アイツはね、お母さんが事故の被害に遭つて、死の淵を彷徨つていた時でも、普通に、平然と、会議があるから、手付かずな仕事があるからつて…！」

ガシヤンとフェンスが勝手な殴打を喰らう。

「幼い頃だつたけど、そんな時でも分かつた。アイツは金しか見えてないつて。その後も、私を家に一人にして、ずっと仕事仕事。家に帰つてくるのは週に2回あれば多い方。でも、私が寝静まつた時間ばかりで、顔なんてほとんど見ない。会わせる顔がないんだ。見

せたくないんだ。妻の心配もしてやれない男の顔なんて…。だからつて、母親を失った子を見放すなんて、金は好きなように使つていからつて、ずっと一人にするなんて…」

美登理の表情は、言葉を連ねていくに度に、怒りを過ぎ、悔しいや哀しいといった悲愴な面持ちへと変わつていつた。

「あのセー、その話、長くなるか？ 御暇したいんだけど」

トキの耐えられない表情による切り出しに、美登理は耳を疑つた。
「は…あ？」

決して途中退場できるような場の空氣ではない。人が真剣に思い悩んでいることを話しているのだから、そこは黙つて聞き入るのが常識だ。しかも美登理が立つている場所は一步間違えれば5階から転落する場所。そのような危険地帯に自分から乗り上がつているのだから、やることなど一つしかない。突けば破裂する風船に近い、土壇場の状況の者からの切迫した話。それをトキは軽く流した。動機に直結しているかもしぬない話を、半分に折つた。

「あ…、あんた、依頼されたん…でしょ？」

美登理の戸惑つた拳動は、信じられないモノを目の当たりにしているようだつた。

トキは気にしてことなく、煙草を深く吸い込み、のへーっと弛緩した表情をさせる。
「ん。まあそうだけ…。事故でああなつたつて話だつたんだが、違うつぽいしなー」

その声や態度は？面倒くさそう?と一見できる。

「もつと…」う、説得するとか、説き伏せるとかしないわけ？

「俺は交渉人じゃねーよ。あと、初対面のヤツにあーだーこーだ言われて曲がるような意志じやないだろ」

トキは煙草の先を美登理に向けて表明した。それに対して、美登理はムスッとした表情をする。

「どうしてそう断言するの？」

問いかけに、トキは煙草を一吸いした。

「……実際に起こりつちまつたことだ。自分を殺すなんぞ、相当な意志が無けりや無理・不可能。でも、お前はやつてのけた。確固たる意志の元で行動に移しちまつた」そこで一回切り、トキは両手を小さく上げ、降参のポーズをする。

「お手上げや。喻え此処で俺がお前を止めたとしても、田を離した隙に……なんてことが起こり得るからな」

諦めた物言いを耳に入れた美登理は、ギリッと歯を食いしばる。
ふう…とトキが息を漏らす。

「そんじゃあ一つ、タメになるか判らんが、話をしてやるわ」

美登理はムスッとした表情のまま沈黙を作った。トキは煙草を一吸いし、続ける。

「前に、「サイロロの出田マイナスはない。振れば必ず前に進めるのだ」とて説いたやつがいた。俺は確かに。と納得した。けど、いつも思つた

ポトリと灰が落ちる。

「叩きつけりや壊れることもあるんじやないか？ ハンマーで潰すこともできりや、切れ味の良い刃物で真つ二つにだつてできるんじやないか？ つてな。でも、これは存外、手荒な扱いをした場合のこと。丁寧に扱えば、老朽して壊れるまでは振り続けられる。前に進める。そりや、出田によつておまちまだがな。1や2を引き続けるヤツもいりや、5や6を引くヤツもいる。平均の3や4のヤツもまた然り」

トキはまた煙を吸い込み、ゆつくりと吐き出した。それは少し厭れたように見える。

「大抵は、1や2を引き続けるヤツが腹を立ててぶん投げて壊しちまつ。5や6を引き続け、飽きて壊しちまつヤツもいる。でもな、だからつて壊すなんざバカのすることだ。もしかしたらひょんなこ

とで風向きが変わるかもしね。そんなことも分からず歎を挿む
なんて」

言い終える前に、チャガンとトキの皿の前に鍵が落ちた。トキは首を伸ばすように見て、「ハツ当たりか?」と美登理に訊くと「違うわよ」と即答される。

「じゃあなんだよ」

「帰るならどーぞつてこと」

美登理は素っ気なくそう言つた。聞いていられないといつ態度が表に出でている。トキはボリボリと後頭部を搔いた。

「んだよ。人が折角タメになる話をしているのに…てか、鍵なんざ必要ねーんだけどな」

トキは足元の鍵を適当に蹴つた。鍵は無造作に回転しながら滑つて、美登理の近くで停止した。

「鍵がないと扉は開かないのよ?」

「ん。鳶渡があるからな。俺らの界隈では帰化きかつってんだが…まあ、帰るときはこうして…」言いながらトキは右手を額に、左手をその対面上の後頭部に当て、説明を続ける。「皿を閉じれば俺が元居た場所に戻れんのさ」

美登理はあまりにも簡単な方法に胡散臭さを覚える。

「じゃあ、それをして早く帰れば?」

「お前はどうすんだ?」

「さあ? そんなのあんたに関係ないでしょ」

美登理はそっぽを向いた。トキはうつんつと喉を鳴らす。

「あのなあ、窮地に立つてゐるやつに安定した精神状態は求めてねえが」

「ひとつと帰れつゝてんのよ……」

ガシャンッ!と乱暴なまでにフェンスが拳に強打された。怒号と

殴打音により、トキは口をペタリと閉じた。

「私ははね、単なる自殺じゃないの。これは復讐なの。アイツを追い詰めてやりたいの。心のどこかでアイツには家族という拠り所があつたはず。それを奪つてやる。この身がアイツみたいなのの拠り所なら、壊してやる。これはそういう復讐なのよ。あんたのいうサイコロなんかじゃないわ……」

怒声と共に表れた、美登理の実態。これはある種の臥薪嘗胆。トキは真剣な表情を作った。真摯な態度…かと思いきや、ポムツと何とも軽い音が鳴りそうな勢いで手の平に判を押した。

「成る程。そういうことなら応援してやるよ」

トキの言葉に、美登理は面喰らつた顔をした。

「はあ？ 何言つてるの？」

トキが何を目的として此処に来たのか。それが美登理には分からなくなつた。助けに来たと言いつつ、自分の自害を応援するなど矛盾もいいところ。必然的に混迷状態に陥る。

トキは何食わぬ顔で美登理に応える。

「親父さんは家族に時間を割り振れなかつたことを後悔していたからな。もし俺がお前を助けちまつたら、一生、その感情には出遭えないだろ？ ああいうモンは事が起きてから知るモンだからな」

それは宮路 博信に事の重大さを理解させるためであり、人が人の死に直面する良い機会、考えを改められる絶好の機会だと、そう言つてゐるようなモノだつた。しかしそれは、美登理の死は無駄ではないということ。博信が後悔をしていたということは、美登理にとって復讐が成功しているということになる。トキが未来から来た男と把握しているからこそ、眞実に他ならない。

「ほれ、早く落ちろ。じゃなかつたか。早く飛べ飛べ

トキは手をパチパチと叩いて美登理を煽る。

「バカにしてんの！？」

憤慨した美登理に、トキは口を尖らせる。

「あれ？ 鳥じゃなかつたつけか？」

「あんた、本当にお父さんから私を助けてくれと頼まれたの！？」

「そりだけど？ いや、別にこの力は100%成功するとは言って

ないから、失敗したら失敗したで俺に害はないのさ」

「そんな適当で…」

「良いんだよ。自分から命投げ出そうとするヤツを助ける義理はない。言うが鳥子と俺は初対面。人情なんて線は一本もない。死のうが死なないが俺には関係ないというわけだ」

「金で雇われてるんじゃないの？」

「金なんてどうでもいいんだよ。面倒か面倒じやないか。それが大事さ」

つまり、トキにとつて美登理を助ける方は面倒の極みであつて、美登理を見放すのが楽だということである。

「あ、ちなみにどういう状況でああなたかは分からんが、そつからだと確實には死ねないとと思うぞ。飛ぶならもつと高いところの方がいいんじやないか？」

「……！ はつ、なるほどね。そつやつて遠まわしに私を飛ばせないようになようって？ 納得して此処から出たら取り押さえる気ね？」

「いや別に。单なる忠告だよ。何なら、こいつから退散してやるつか」「え？」

想定外だったのか、美登理は目を丸くさせた。

トキはそんな美登理を余所に、帰化のポーズをする。美登理の脳裏にトキが言つていた説明が流れ、本当に帰る気だということが導き出された。一瞬、止めようかと口が開きかけたが、それをしては先が立たないことを知つた美登理は、ぺたりと口を閉じた。そうすることことで、怒りや哀しみを背負つた空気が、また美登理に流れ出した。それを横目で見たトキは、ふつと鼻から空気を出した。

「最後に一つ、^{ルート}詞を置いていく

トキの真剣な声に、美登理はまじまじと目を交わすように見つめた。

「鳥子……、飛ぶ方向を見誤るなよ」

その詞は、しつかりと美登理の耳に届いたが、その意味を汲み取ることは、難しく、眉が曲がった。

「は？…………何が言いたいのよ？」

トキはほくそ笑むように片頬を持ち上げた。

「どこに向かつて飛ぶつもりか、よく考えろってことや」

トキはそう言うと、目を瞑つた。美登理の疑問はただただ増すばかりで、一向に晴れやかな気分には陥らない。だが、軽快な雰囲気を伴つた声が突いた。

「まつ、来世で縁が有つたら、そん時は宜しく」

からかうような物言い。その直後、トキの身体全身がゆらりとブレ、七色の光が生み出された。

そして、形のあつた砂が風に流されるが如く、トキの身体が固有の形を失い、粒子となつていった。

美登理は、七色に光輝く粒子に何の疑問も抱かず、奥歯を噛み締めた。

「何よ……飛ぶ方向つて……」

美登理一人となつた空間に、木霊する声。その後に、額とフェンスが接触し、カシャンと虚しい音を奏でた。その時、パサパサという軽い羽音がする。見上げれば、黒と白の頭に灰色の羽をしたシジユウカラという小さな鳥が飛んでいた。シジユウカラは遠くの方へ飛んでいき、一本の街路樹の小さく空いた穴の中に入つていった。美登理はただただ、立ち尽くし、その姿を見つめていた。

煙の漂うトキの部屋。あれから一日が経過した。トキは何事もなかつたかのように、寝転がりながら煙草を吸い、テレビを観賞していた。

「ふああ

欠伸が所々で出る。

窓に目をやる。空は汚い色をしているが、雲も見当たらず良い天気だった。

「……昼飯、何食つかな」

咳きつつ、リモコンをいじる。

「グルメ番組ねえかな」

チャンネルを何度も変える。そんな日常を流す中

バアアンッ！――！

玄関扉が壊さんばかりの勢いで開かれた。

「ん―？」

不躾な轟音にトキは飛びよひて上半身を起します。

ドッダッダッダッダ！

間もなくして、誰かが侵入してきた。

「――」

トキはその人物を捉え、何かを発しようとした。が、そんなことお構いなしに、掛け声が先行する。

「喰つらつえ――ッ！」

「ゴウッ！と四角いモノが烈火の如く投げつけられ、風が轟く。

「こつー？」

トキは反応することさえ出来ず、素直なまでに的になり、四角いモノの側面が額に直撃した。

ドガッ！

トキは抵抗の余地なく、痛烈な衝撃によりそのまま後ろに倒れた。ヒュンヒュンと四角いモノは空中で回転し、垂直に落下する。落下地点はトキの腹の上。

ドッ　　という鈍い音が木靈した。

「ぐつづつふつつ！」

あまりの激痛にトキの意識が飛びかける。しかし意識は辛うじて保たれていた。いつそ飛んでくれたほうが楽だったと思える痛みが痛覚を介して刺激を与える。

「口、口と声にならない声を発し、悶え苦しむトキを見て、侵入者、いや、暴君は言つ。

「来世は遠い話だから、現世で逢いに来てやったわよ」

腰に手を当て、指先をトキに向け、毅然とした態度。

悶え、涙を浮かべながらも、しつかりとその人物を視界に捉えたトキは、辛辛に言つ。

「と……り……！」

精悍な赴きの侵入者は、鳥子　もとい、富路　美登理であった。トキはゲホゲホと嗚咽を吐いて息を整える。そしてふーっと大きく息を肺に取り込んで、

「てつめえ！　殺す気か！　…」
と怒号をぶちまける。

「成功報酬の受け取りに失敗したあんたが悪いのよ

美登理はしてやつたと言わんばかりの表情を見せた。

トキはその言葉から、何が自分を痛めつけたのか見てみると、傍らに縦30cm・横50cm・厚み8cmほどのアタッシュケースが寄り添うように寝転がっていた。トキはそれを持ち上げる。中々の重量感だった。

アタッシュケース。中の物品を保護するため、強度は非情に硬い。映画などでは拳銃の盾に使われることもしばしばあるほど。勿論、それほどの強度のアイテムは钝器にも最適。打ち所が良ければ相手を一撃の下、撃破することが可能という優れものだ。

「……。まじで殺す気か！」

「何よ？ 振込先を指定してないんだから、直接しかないじゃない」「あー……、そういうや伝えてなかつたな。どうせ無いモンだと思つてたから……つて！ そういうことでなく！ 生きてるつてことはだ、俺は命の恩人だろうが！ 頗著の一つくらい覚えて来い！」

説教もとい不満をぶちまけるトキに対し美登理は、「はあん？ 県庁所在地デスカ、アハーン」と恍けた面構え。ワナワナとトキの拳が震える。

「てめえ、性格ひん曲がりすぎだろ……ッ！」

美登理はフフンッと鼻を鳴らす。

「ま、一応確認しといてよ、中身」

怒りの矛先を簡単に払いのける美登理に、トキは厭きれ、言われるがままにアタッシュケースを開いた。中には100万単位の札束が20束。20000万円。と、ひと際日に付く包装されている蕎麦の袋。トキは2千万円という巨額に目も暮れず、蕎麦の袋を取り出した。

「なんで蕎麦が？」

「あれ、知らない？ 日本には代々、引越の際に近所さんに挨拶回りで、蕎麦を配る風習があるのよ。細く長いお付き合いを。という意味合いと、側に置かせて頂きますと掛けているやつ」

「……それは知っているが、それを俺に渡すというのは……どういう事なんだ？」

トキは自身の洗練された勘織りを単純明快に否定したかった。察したくないと暗に、いや、全面に出した表情に対し、美登理は満面の笑みで答える。

「此処に引っ越してきたのよ、私」

「

余白、空白。そんな時間が流れすぎていく。美登理はそんな状態お構いなしに話を続ける。

「あの後、お父さんと話しあつてね。学校には通うけど、一人暮らしさせて欲しこりといつてね。お父さんは若い女の子の一人暮らしは危ないって認めなかつたけど、『信用たる人物の近くなら』ってことで渋々了承してくれたわ」

腕を組んで喜々と語る美登理の言葉に、抜け殻のようだつたトキが反応を示す。

「信用たる人物って？」

「あんたのこと」

「……」

トキの口の端がヒクヒクと嫌に持ち上げる。

「ああ、あとココさ、私が大家になつたから」

あつけらかんとした態度で美登理はそう言明した。

「は？」

「家を出るときに、お父さんから5億貰つてね。1億でここの中と物件を買つて大家さんについたら、快く売つてくれてね。ほら、

権利書」

突飛な話に真剣に耳を傾ける気はトキに無かつたが、突き出された美登理の手には、元大家の古谷は『この土地と物件を美登理に譲渡する』という実印入りの権利書があつた。

「……まじ……かよ。にしても手が早すぎじゃねえか？」

「謹慎処分が1週間しかないから、急がないと、だったのよ」

「謹慎処分？」

トキの眉が曲がる。鍵をくすねたにしろ謹慎処分は過多な見方。疑問が溢れる中、美登理は片目を閉じて補足する。

「そ、あの後、私は飛び降りる意志を失くして屋上に戻ったんだけど、誰かに見られていたらしくて、学校に連絡されてね。駆けつけた教師たちに見つかって敢え無く御用。加えて、あんたが残していった産物が拍車をかけてねー」

トキは脳内に検索をかけて答えを見出す。

「俺が残していつたって、あの詞か？」

「違う。あんたがパカスカ吸つてたもの」

速攻で否定され、トキは己の行動を顧みて、「あー……」とうねり声を上げた。

「……それは…悪かつたな」

「あれのせいで私が煙草吸つてたって散々言われたんだから。お父さんはすぐ分かってくれたけど、教員は何であんなに頭が硬いのかしらねえ」

手のひらを上にして、美登理は嘆息交じりに呆れ顔を作った。

「ああ、そういうば氣になつてたんだけどさ」

美登理は思い出したように手の平に判を押した。

「ん?」

「何でお父さんはあんたのことを知っているの？ 確かお父さんは私が飛び降りして、重傷で助からないからってことであんたに依頼したのよね。今私は飛び降りをしていない【私】なんだから、お父さんがあんたに依頼するなんてしないわよね？」

美登理の言い分は、過去の改変を行なう前、行なった後で生じる現行の世界の情報の変化のことを指す。トキは感心した表情を作る

と、すぐに得意げに口を開いた。

「へえ、いい所に目を付けるな。まあ……理解できんだろうが、一応説明しよう」

トキはそう言つと、隅に置いてあつたメモ用紙を拾い、その中から2枚の紙を千切つた。

「人というのは【3枚の紙】で出来ている。とされる感じより「3枚の紙？」

美登理は膝を折つて床に置かれた紙を見つめる。トキは続ける。
「ああ、1枚は現在の紙、1枚は過去の紙、1枚は未来の紙、ってな具合にな。未来の紙はあまりに薄く、有るのか無いのかさえ分からぬほど。過去の紙はぶ厚く、現在の紙はその中間をゆく」

トキは1枚の紙の上に、新たに1枚を乗せる。

「現在の紙に書いたことは、過去の紙にそのまま反映され、過去に反映された事柄は現在の紙に透かしのように与るんだ。鳶渡というのはこの過去の紙に映されている事柄を無理やり書き換え、現在に透かさせる力のこと」

「ふーん……まあ、何となく分かるけど、私の疑問は……」

「そう……、鳥子の疑問は平たく言えば俺の情報が書き換えされていない、ということだろ」

「うん」

トキは重ねていた2枚の下の紙を抜き取つた。

「それは鳶人にはこの過去の紙が存在しないからだ。俺らの界限では過去無しと云われている。まあ、鳶人を指す言葉だ。……過去無しの者は過去の紙が無いため、現在の紙の情報だけが全てとなる。そのため、現行世界で俺と干渉した者は、直接、現在の紙に俺の情報が記載される。そしてそれは過去に反映されない」

「ふーん……でもそれだと、過去の紙の方を書き換え最中のあんたの情報はどうなるの？ あんたが屋上に来たこととか覚えてるけど」

「そういう情報も鳶渡の力が現行世界に反映された時に、現在の紙に書かれることになる」

美登理は真剣な態度でそれらを耳に入れ、思考させ、最後に頭を「テンと横に倒した。トキは一瞬、理解したのかと思つていたため、その分かりきつていらない表現に力クンと頭を下げた。

「ま、要するにだ。鳶人の情報つてのは書き換え不可能、干渉した世界がどちらであれ、言つなれば忘れられないってこいつた」難しいことを素つ飛ばした簡潔な説明に、美登理は手のひらに判を押した。

「なるほど。分かり易いわ。そっちの理屈を述べられても私みたいな一般人じゃピンとこないからねー」

「まあ、そうだよな」

トキは無駄に終わつた説明を悔い改めるようにため息を漏らした。美登理は立ち上がりようと膝に手を置く最中に、「ま、時間はあるし追々理解していくわ」と呟いた。

そして立ち上がり、ふいつと後ろを向いて玄関の方へ歩いていく。「じゃ、私忙しいから。あ、一応言つておくわ」

「ん?」

トキは礼でも言つ気かと思つた。が、放たれたのは、

「これからよろしくね」

という挨拶回りの言葉だつた。

顔を見せずに言う隣人となつた者に、トキは納得いかない表情で頭を一搔きした。美登理は玄関を閉める最中に、トキに聞こえぬよう、か細く「ありがとね」と呟いた。

そんなことを知らぬトキは一言。

「やれやれ……鳥の中でも、あいつは燕だな」

そして窓の外に広がる空を見て、「明日から…五月蠅くなるな」と軽い息の下で呟いた。

カーン…カンカン

鉄筋の音が響く工場地帯。そこに新たに加わるドリルや電動丸の子の音。一等古ぼけたアパートに視点を当てるど、そこは外装工事に取り掛かっている最中であった。

リフォームを行つてゐるアパートを、訝し気な表情で見つめる一人がいた。その者は、黒いスーツに黒のショルダーバックを身につけてゐる女性だつた。身体の線は細く、顔の造形は怜悧さと美に富んでおり、大和撫子のような綺麗な黒髪は、スーツに合わせたのか後ろに束ねられていた。

傍目から見れば美しいO-に見えるが、場所が場所だけあつてか、その輝きは浮いていた。

女は辺りを右見左見し、105号室へと歩いてゆく。玄関前にたどり着くと、慣れたように腕を振るひ。

コンコン

コンコンコン

「はいよ、勝手にはいつてくん」

借主が返事をする前に、ガチャリと扉が無作法に開いた。女が足を踏み入れると、借主は驚くことなくこづつ言つた。

「おう、シズクか」

トキは美女の名称を言つと赳ろに立ち上がり、窓を開けた。煙が

吸い寄せられるように外へと駆けて行く。

シズクと呼ばれた美女は、立ちながら腰を曲げて靴の踵を押し、脱ぐと、床に足をついた。

「こんなにちば。上がらせてもらひつわよ」

「あいよ」

トキは座布団を対面上に放り投げた。シズクは進められるがままに膝を折りたたみ、正座をした。

「富路 美登理さんの件、うまく遂行したようね」

「お前なあ……ああいうモンは俺に回すなど言つてるだひ。もつと上手いやつにやらせてくれ。信濃しなのとか口先上手だり」

「一刻を争う容態なのだから、悠長に信濃さんのような遠くに居る人を呼べないわ。一番の近場のあなたを選んだ私の力量を褒めてほしいわ」

シズクの言い分に、トキは返す言葉を見つけられなかつた。萎縮したのを隠すように、煙草に火をつけ煙に巻く。シズクは煙を嫌がる素振りを見せせず、数拍置いてから口を開いた。

「外で見かけたのだけど、改装しているのね、このアパート」

トキは嫌味な顔をする。

「ココの大家が変わったんだよ。誰だと思つ?」

シズクは眼球を右斜めに移動させ考えるが、すぐに諦めた。

「……分からないわ

「件の美登理だ」

答えに、シズクの目尻がピクリと反応した。

「助けた上にこんな側にまで『足労するなんて、相当巧くやつたのね

「おいおい……俺はあいつにそこまで干渉してねーよ。ただし、手を引いてやつただけさ」

トキの言葉の意は、美登理が些細なキッカケを振り子の重石とし、

自力で持ち直したということ。しかし、第三者に近いシズクからすれば、その捉え方は異なるものとなる。

「あら、エスコートがお得意なのね」

離れぬ概念にトキは参った顔をする。

「ちげーって…俺が他人に深く関わること苦手なの、知ってるだろ」「可愛い子なら別なんじやないの？ トキも男性だし、その辺りの欲というか、性には流石に勝てないのじやないかしら」

片目を瞑つてもう一方の猜疑心満々の目で『この変態』という念を送るシズク。

「俺が鳥子に欲情してるってか？ [冗談] いうなよ」

「鳥子？ 美登理さんのことかしら。もうあだ名で呼び合つ仲なのね？」

正座の体勢のまま前傾姿勢となり詰め寄つてくるシズクに対し、トキは頬に汗を垂らし、とつてつけたような咳払いをする。

「あいつが自分のことを鳥だなんだと云うから付けただけだよ。ああ、そういうば手渡された金があつから、渡しておくれ」

トキはそそくさと立ち上がりつ押入れの前に行く。シズクは前傾姿勢で強張つた身体の力を抜き、すつと礼儀の良い正座へ戻した。そしてトキから視線を切る。

「話を逸らすの下手ね」

シズクの冷たく醒めたような頬の持ち上がりを見たトキは、ガクンと頭を下げて「もう止してくれ」と切々に吐きながら襖を引いた。

襖の中は布団や掃除機などの生活用品が納められていて、浮いたように札束がゴロゴロと無造作に置かれていた。トキはその大金の中から五百万円を手にし、シズクの前に五束を一つずつ横に並べ、鎮座させた。

「取り分。これでいいだろ」

シズクはその大金を見ても顔色一つ変えず、「ええ」とだけ言い、

手持ちのショルダーバックの中に一束ずつ丁寧に納めていく。

「この機に渡しておくわ」

シズクは五百万を納め終えると、バックの中から黒い手帳を取り出し、中の一枚を破り、トキに突き出した。

「なんだ、これ」

トキは口をへの字に曲げて、指で煙草を挟むように受け取った。

「次の依頼よ」

紙切れの中身は、部屋番号とそこまでの道筋、それと氏名だけが記載されている、何とも大雑把なものだった。シズクは「依頼人は富路 美登理が入院していた病院に居るわ」と付け足した。

トキは「よくこんな早くに次から次に見つけてくるな」と感嘆しつつ、呆れ顔を見せた。

「つーか、あの病院だつたら俺んところまで来るのが礼儀じやないか？」

「私はトキのことを、？入院患者を呼び立てる外道？とは思つていなかから」

明言されたトキは、返す言葉を見つけられず、困ったように頭を搔いた。シズクは微笑し、さらに続けた。

「依頼人の事柄は直接本人に会つて尋ねてね」

トキは「ん」と喉を鳴らした。

「いつも思うが、何でそこまで訊いてこないんだ？」

「私の口からじゃ、伝わらないことがあるからよ」

人との情報伝達に置いて、重要視されるのは約五点。言葉・その強弱・視線（目の動き）・身振り（身体の動き）・そして全体の印象（雰囲気）である。人づてではこれらの内、言葉しか伝えられないため、妙な食い違い・誤解が生じる可能性が飛躍する。

鳶渡は命に関わる事案が多くある。

シズクは足らぬ情報を伝えることが、如何に愚鈍な行為かを心得ている。

合算し、導き出される答えは、鳶人が依頼主から直接尋ねる

とこう事になる。

トキもそれらを心得てはいるが、質問の本質は『大筋はどういつたモノか』であった。誤解を招いたのはトキの言葉足らずが原因。そのため、訂正することなく「そつか」と完結させる策へと移行させた。あまりずばすばと釘を刺されるのは好ましくないようだ。

少々の沈黙が生まれ、トキは煙草を吹かせる。シズクはそれをジツと見つめていた。視線に気づいたトキは、「煙草、吸うか?」とシズクに進めた。

シズクはほんのりと薄紅色に頬を染め、

「あなたが今吸っているのなら貰うわ。丸まる一本は要らないから」と答えた。

「ん。半分でいいのか」

トキはそう言って、箱から新しい一本を取り出し、指で半分に千切つた。人が吸っているモノを吸わせるなど、あまり気分の良いものではないだろう」という紳士的な配慮だ。

「ほれ」

得意げな顔をしてシズクに突き出す。

シズクは厭れた顔をすると、目を瞑り、「……やつぱり要らないわ。気分じゃないから」と首を横に振った。

断られたトキは眉を上げると手を引っこめ、「……んだよ。最近煙草はたけーんだぞ」とぼやきながら箱の上に半分の煙草を置いた。はあ…とシズクはトキに分からぬようにため息を付くと、静かに立ち上がった。

「用事があるから、御暇するわ」

「ん。ああ、またな」

トキが返事すると、シズクは玄関へ歩いていった。

そして靴を履く最中に振り向き、紙切れと共に手を小振りしているトキを見て、こう言い残した。

「私の観点で申し訳ないけど、その顎鬚、似合つてないわよ」

見送つていったトキはピタリと静止し、そつと顎鬚に触れ、「似合つて…ないのか…」と悩ましく呟いた。その様子を見終えると、シズクは前を向きなおし、笑みを隠して玄関を開いた。

トキのアパートから出たシズクは、とある駅の近くの交差点の前で、電柱に背を預けながら人を待っていた。

時折、辺りを見渡しては携帯に目をやり、時刻を確認する。そんな時、視線が携帯に向いたのを街つたような時機に、横から声を掛けられる。

「よし、シズクちゃん。無代の餓鬼とはヨロシクやってっか?」

渋味のあるどら声で、粗野な言い回しをシズクに発したのは、30代後半の男であった。

顔つきは、セットされていない天然パーマの黒髪に、疲れたような二重瞼が特徴的な目。嘲るのが得意そうな眉と口に、小汚い印象の無精髭。

身なりは、灰色をした薄手のロングコート、下には着馴れたスーツ、靴はブラウンのビジネスシューズと、一見すればサラリーマンのようではあるが、どこか胡散臭さを漂わせる、そんな男であった。男はロングコートのポケットに入れたまま、シズクの側まで近寄った。道行く人々から見れば、上司と部下が待ち合せたように映る。

シズクは冷めた目で男を見るや否や、「ゴソリと左手をズボンのポケットに入れ、細く小さな機械を取り出した。

「セクハラですよ、加室さん。私がこの録音機を警察に持ち込めば、即逮捕ですよ」

小型の録音機の頭部分は赤い光が点滅していた。加室と呼ばれた男は、頬に汗を流して口を曲げた。

「手厳しいな、おい。また無代の奴にフラれたのか?」

揶揄な物言いにシズクは少々の苛立ちや不満を含んで返す。

「別に、あんな唐変木の粗チンに興味はありません」

「なんだ、見たことあるのか」

「見ていません。本当に豚箱送りにされたいのですか?」

「お、おいおい。言つたのはシズクちゃんの方じやん」

シズクのハツカタリの対象として、加室は持つて来いの的となっていた。

加室は無精髭を搔くと、「しかし、シズクちゃんの用心深さには参るよ」と感心の念を込めて吐いた。

シズクは面倒くせうように目を瞑り、「周到で加室さんには敵いませんよ」と、相手を持ち上げた。

対して、加室は煽てに乗らず、「そつかあ?」と囁いた。

すると、シズクからふう…といつ嘆息が漏れた。軽く腕を組んで顔を逸らす無愛想な態度に、加室はうーん…と眉間にシワを寄せる。

「仕事の話、すっか」

早急に終わらせたいと露にしてこむことを悟つた加室は、そういつて後方にある喫茶店を親指で指差した。

「ええ。そうしましよう」

足早にシズクはカツカツと足音を鳴らして加室の脇を通り、先陣を切つていった。

後ろ姿を見つづ、加室は呟いた。

「態度に滅茶苦茶表れんのに、何でアイツは氣づかねーんだ」

カラーンコロンといづ鈴の音が鳴った。

* * *

身支度を済ませ、顎をさつぱりとさせたトキは、富路 美登理が過去の改変前に入院していた病院に居た。真っ直ぐエレベーターに向かい、搭乗し、まだ違和感の残る顎を撫でながら、一枚の紙切れを見る。

(3階の東南突き当りか)

エレベーターは3階に到着した。トキは紙切れを仕舞うことなく東南の廊下を歩く。たどり着いた突き当たりの一室の名札には『篠原 つや子』と記されていた。トキは持っている紙切れを確認する。

「……」

呟くと、名前の記されているであろう紙切れをクシャリと丸め、ポケットに忍ばせた。

そして腕を振るい、ノックをする。『ンンン』と音を立せ、返事を待たずしてドアをスライドさせた。

視界をついたのは夕陽の光と、ベッドから上半身を起こした体勢で、死んだような微笑みをかけてくる、年老いた女性だった。

衰え、乾いた華奢な身体。年を表す織り込まれたシワの数々、いくつも見られる黒子のような墨色の斑点。そして、不自然に黒い髪の毛。

傍目から見ればただの『老体の女性だが、トキは釘付けにされた。儂い・虚無・黄眉、そういうた負に隣接した不明瞭な物々が一心に集まつたような女性に、ただただ啞然とした。

「……貴方が、鉢代さんが言つていた、無代……トキさんで？」

つや子が開口したのは、放心状態のトキを十数秒眺めてからであった。震み掛かった声に、トキは我に返つたように見開いていた目を閉じて、改めて開いた。

「あ……ああ。あんたが、篠原 つや子……？」

「ええ。お世話になります」

つや子は甲斐甲斐しく頭を下げた。そして来客用の椅子を指差し、「お掛けください」と進めた。「悪いね」とトキは引いた態度で椅子に腰を下ろした。

「……」

トキは直ぐに用件を訊くつもりであったが、口が軽く開かなかつた。何か言おうにも、脳が勝手に言葉を篩い（ふるい）に掛け、厳選を始めてしまう。必然的に沈黙が長くなる。

つや子は、そんな虫の這うような時間の空間を、容易く流してゆく。まるで魂が半分掛け落ちていてるようにさえ思えてくる。

トキは小さく喉を鳴らして口を開いた。

「あんた、歳はいくつに？」

出てきた言葉は、何ともその場しのぎのよつたな稚拙なモノだつた。篩いに掛けられた言葉の中に、生き残るもののがいなかつたのだ。

つや子は希薄な笑みを浮かべて、「今、62になります」と答えた。

トキは見た目以上に若いつや子の年齢に、少々驚いた。

「ほお、なら、鶯渡を使えば後十数年は固いな」

女性の平均寿命は現在では約85歳と長きに渡るものである。つや子は目を伏せると、振つているのかさえ分からぬほど小さく首を横に振り、疲れきつた目をトキに当てるこう断言した。

「いえいえ、私は後、5日足らずでこの世を去ります」

間が開いた。聴き入れたトキの耳から脳にその言葉が届くのに、時間が要した。

「…………」

「恥ずかしながら、発見が遅れてもうどうにもならない癌なんですよ。病名は……悪性末梢神経鞘腫瘍といつ……末期癌です」

つや子の説明に、トキは第一印象から感じた物々を理解する。

日々行われる検査、癌の摘出手術・抗がん剤・それに伴う疼痛。手術前の恐怖や恐怖・死の契機。それらに曝される毎日、変わらぬ毎日。労の居場所のない毎日。気が滅入り、淡い背景を背負つのは当然と言える。

ぽんやりと、そして沈痛な面持ちで、つや子はこいつ話す。

「もう……」で一年になります。最初の頃は……皆、心配してくれて、よく顔を見せに来ててくれたものです。でも、時間が経つと、意識が薄れしていくのか……皆、忘れたように来てくれなくなりました。娘は時折来ますが、用事を片すと、忙しく出て行くのです

そこで、つや子は笑う場面でも無いのに、笑みを浮かべた。

「でも、それでよかつたのかもしません。みすぼらしい姿を見られるのは、心中が痛みますから……。見てください、この有様を」

そういうて、つや子は髪に手を掛け、下へズルリと落とした。黒髪は手に纏い、頭上は蛻の空となり、髪の毛といえるものが全て無くなっていた。突如として、坊主となつたつや子を前に、トキは目を細め、嘆かわしい表情をさせた。

抗がん剤による副作用として、吐き気や脱毛が上げられる。副作用の無い抗がん剤など存在しない。つや子の姿は、それを如実に語つていた。

トキは視線をつや子の手元に向けた。

「そのウイッグは、娘さんからの贈り物で？」

意外な質問につや子は顎が少し上がる程度の反応を見せる、「ええ。その通りです」と嬉しそうに答えた。

「中々、似合つてたじやないか」

口の端を持ち上げて言うトキから視線を切つて、つや子はウイッグをとんとんと軽く叩いた。

「……不自然と思いませんか。こんな老いぼれにこんなツヤのある黒髪なんて……」

「ま、多少はな。でもまあ、見慣れりやそれも判らんようになるさ」トキは歯に衣着せずに言つてのけた。そんな正直者を見て、つや子は柔和で彌りの深い笑みになった。

「貴方の声と云いますか…言葉と云いますか、何だか不思議ねえ…力が沸いてくる様な…」

小首を傾げて微笑むつや子を見て、トキに笑みが零れた。

「あんたの笑顔をも相当なもんだ。人を幸せにする、そんな良い笑顔だ」

トキの中に、本調子になつたらどれほど人を魅了する笑顔をするのかと、期待と好奇心が込み上ってきた。それほどまでに、つや子の笑顔は心強い。この女性には、死んだような微笑みはあまりに不釣合い。トキの中に、沸々と『そんな陰鬱なモノを生まれさせてはいけない』、という使命感が込み上げた。

「あんたの依頼は、癌を早期に発見できる時期に俺が行き、忠告をして貰いたい。ということでいいか？」

つや子は首を縦に振ることはしなかった。その胸中をまるで捉えられないトキは、神妙な顔つきになつた。

「今更、生き永らえようとは思つておりません。ただ、このまま逝きたくは無いのです。こんな梅雨のような心のまま死ぬのは……辛い…」

文末になるにつれ、つや子の目に涙が微かに溢れた。徐々にトキの目が見開いていく。素直に、驚いていた。死を受け入れていることに。延命を望まないことに。ただ心の靄もやを晴らして死にたいといつや子に、驚いていた。自害とは違う、自然の摂理に身を任せる行為。目の前に、未来を繋ぐ希望があるのに、それに頼ろうとせず、今、この時の心の雨を止ませたい。つや子は真っ直ぐとそれだけを目指していた。

「……じゃあ、俺は何をすればいい」

目的を見失ったトキが訊くと、つや子は涙を拭つた。

「難しいことはお願いしません。一つ、伝言を頼みたいのです」

「伝言…？ 誰に？」

ウイッグを持つている手に力を込めて、つや子は言ひ。願うつよつに言ひ。

「私は。2週間ほど前の私に、伝えて欲しいのです」

夕陽の光を帯びた、老体一人。その傍らで、無言を突き通す男一人。

「ずっと考えて、ずっと後悔していました。もうここ、もうここ…と。諦めていた自分に…今更ながら、後悔しています。生きることは諦めましたが、同時に、笑って逝くことさえも、私は諦めていたのです」

ベッドの影に乗るつや子の影が、下へ下へと下がつてゆく。丸椅子に座る影は、ピクリとも動かない。霞掛かった声に、嗚咽が交じり、拍車を掛け、枯れ枯れしく尊いものへと変わつてゆく。

「辛いことです…それは、とんでもなく辛い」と…なのに…だから…」

胸を押さえ、苦しそうにするつや子に、トキは声を掛けることも、背を擦ることもせず、ただ黙つて傾聴していた。その不動の姿は、とても心強く映つていた。

通常の反応であれば、真っ先にナースコールが押されるだひつ。それは間違いではない。余命が後五日という者の身体は、既に死んでいるようなものなのだから、些細なことで絶命しても、何らおかしくはない。

しかしトキは何もしなかつた。非情に映る行為に思えるが、これはつや子の想いを呑んだ、正しい選択であった。

自身の手ではどうしようも出来ない、後悔。それを払拭してくれることであるトキ。その者に、体調云々などの訴えを付け加えるなど、一人の人として、許せるべき行為ではない。

トキの今のすべき事は、耳を傾けること。微かな埃さえも見逃さない程に、つや子の言葉を、受け取ること。

やしてつや子は、話すこと。それだけである。苦しむことではない。トキに伝えること。そうしなければ、鳶渡は買えない。

つや子は荒れる呼吸を整えて、笑ってみせた。

「どうか、伝えて、下さい。私に

」

「分かった」

影は言葉を受け取ると立ち上がり、もう一つの影へと歩み寄り、その頂上へと触れた。そして影は霧散し、一つの影へと同化していった。

「……」

トキはつや子の鳶螺の中で、言葉を反芻していた。
湿っぽくも、乾いたようでも、晴れやかでもない、朦朧とした気持ちが広がる。想いは募る。

本当に、それだけを願えるものだらうか

鳶渡ならば、延命など、やりように依ればいくらでも出来ること。シズクがその説明を怠つたわけではなく、全てを知った上での、つや子の選択、希望。

「命の契機に逆らわず、抗わず、時が来れば、素直に逝く……か。

凄いよ、あんたは」

畏敬にも近い、尊敬の念が溢れる。

とはいえ、これは人の在り方ではない。

人は阿呆のように、馬鹿の一つ覚えのように、滑稽だらうが何だらうが、生にしがみつくのが在り方なのだ。何故なら、産まれた限

り、命がある限り、目の前には「生?」が存在し続けているからだ。

その生には縄が縛り付けられていて、同様に、人にも縄が縛られている。生は刻々と先へ向かい、人はそれを追い続けなければならない。時に引きずられようとも、追い続けなければならない。

つや子は、言うなればそれを諦めたことになる。病を治す選択を放棄し、足を止めてしまったのだ。鳶渡にしがみ付かなかつたのだ。しかし、だからこそ、トキにはそれが新鮮で、美しく思えた。

永く生きた者の最期の刻、どういった心中で、胸中で、死に往くのか。笑うことが出来るだろうか。幸福に包まれるのだろうか。それとも、悲運だと愁嘆しゅうたんし、悔し涙を落とすのだろうか。どちらが人間らしいか、それは定かではない。

ただ、つや子は、前者を強く望んだ。
トキはそれを美しいと感じた。

どちらが人間らしいか、それは定かではない。が、望む結末を迎えることは、幸福であることに、間違はないだろう。

「ん」

思い耽つていると、光が照らされた。目を閉じる。
瞼の裏が照らされる。

目を開くと、死んだように眠りについている、つや子が居た。

「……」

窓から見える空の色からして、まだ正午を回つた頃合であつた。

つや子に記憶を呼び起こして貰い、到着点を定める過想により飛んで来たため、眠っている時に飛んでくるということはまずない。トキは敢えて到着点を僅かにずらした。

「…………すーすー」という寝息が聞こえる。

トキは丸椅子に腰を下ろし、つや子の起床を待つ。
そして視線を外すことなく、ただただ視続けた。

「…………ん」

程なくして、つや子は眠りから覚めた。痛みが伴っているのか、表情は芳しくないものになる。覗く肩が震えている。痛みで身体が強張っているようだ。痛々しく頭を小刻みに揺らしている。すると、身体は一切の動きを止めた。

「…………」

傍らに倒れる、トキの存在に気づいたのだ。

トキは明るい笑みを作った。

「よひ

氣をよくして話し掛けると、つや子は目を見開き、「ああ……」と嘆くような声を微かにさせた。そして諦めたように、細くため息をつく。「死神というのは、こんな姿をしているのね……」

想像外の言葉に、トキは顔を引き攣らせる。

「俺は死神じゃない」

「じゃあ、一体何者なのですかね?」

「言ひなりや、使いの者だな」

「…………?」

つや子の顔には、よく分からないと書かれていた。当然の反応に、トキは口の端を持ち上げると、突如として、真剣な表情へと変えた。「驚かないで訊いてくれ。俺は、今から2週間後の未来のあなたに、

篠原 つや子に、伝言を預かってきた 使いの者だ

「……はあ……？」

つや子は驚きはしなかったものの、阿呆らしい顔をした。

「ま、説明不足だから信じられないとは思うが、それだけは踏まえていて欲しい。そして聞いて欲しい」

あまりにも真剣味を帯びているトキに、つや子は不思議ながらも目を閉じ、耳を澄ませた。使いの者は、言葉の一切を変えず、其の儘を伝える。

どうせ貴女は死に往く身

だから、迷惑なんて気にしないで

色んな人と会って、色々な話をしなさい

「 最期の我儘くらい、許してくれるでしょう……とれ」

静聴していたつや子は、話し終えてからもまだ、口を開じたままだった。数十秒の時を経て、口が開く。

「私から…と言いましたよね」

「ああ」

つや子は、目を開いた。

「その時の私は、どのようにでしたか」

「ただ…悔いていた。命よりも大事なものを失つたまま逝くことこ

……」

語りが果て、つや子の目に、滂沱の涙が溢れ出した。

「そう…ですか。喻え私からで無くとも……、その言葉は、身に沁みます」

ボロボロと溢れ出る涙を止める手段を、トキは持ち合わせていい。だからトキは、黙つて居続けた。

病室には、つや子の咽び泣く声だけが、響いた。

だが、それは束の間のこと。深々な空間は壊されたことになった。

スライドドアが開き、大きな紙袋を手に持った女性が入ってきたからだ。

「あーお母さん、水とか上着とか持ってきたけど、どなたですか？」言葉を繋いでトキに質問を投げかけた少し太身の女性は、つや子の娘であった。知り合いが面会に来ていると勘違いしているらしく、騒ぎ立てるこはしなかった。つや子は慌てて反対側へ顔を向け、涙を隠した。

トキは何食わぬ顔で「メッセンジャーみたいなもんです」と答えた。メッセンジャー？と顔が傾ぐが、トキはそれ以上何も付け足そうとはしなかった。

そして大腿に手を当て立ち上がり、トキはつや子の娘の脇を通って病室から出て行く。

つや子の娘は「もういいんですか？」と尋ねた。トキは娘から視線を切つて、つや子を一度だけ見ると、笑つてこう言つた。

「ああ。もう、伝えきれたと思うからな」

トキはスライドドアを閉めた。

そしてドアにもたれ掛かり、耳を澄ませた。

中から聞こえて来るのは、霞掛かつた、か細い声が一つ。

「ひろ子。お願いがあるの」

病室の前は、無人となっていた。

トキは現行世界に帰化し、夜を感じた。

つや子は看護師が寝かせたのか、仰向けで布団被り、疲れたように眠っていた。まだ19時ほどであつたが、体力が無いつや子にとって、泣くということは相当な消耗となつていたようだ。

トキはポリポリと頬を搔いた。

「なんだ、わざわざすらす必要、なかつたのか」

それだけを言い残し、つや子を起こすこともせず、トキは忍ぶよう病室から出ていった。

もうすぐ改変された過去が、現行世界に波及する。薦渡の時が始まる。

それから三日後、トキはつや子の病室の前に居た。

奥から明るい声が響き、外からでも幸せに満ち溢れた空間だと、肌に感じる。トキは気付かれないよう、そつと僅かにドアを引き、隙間から中を覗き込む。

ベッドの周りを囲むように、あの時の太身の女性と子どもが2名、つや子と同年代ほどの女性2名、男性1名が居た。そして、見たこともない、満面の笑みを浮かべる生き生きたつや子が一人。

第一印象から感じた負など何処へやら。今は幸せを噛み締めているか如く、生命に溢れた、奇跡のような笑顔が零れていた。

トキの顔の筋肉は釣られるように綻び、笑顔を見出した。

「やつぱり、あなたの笑顔は相当なものだ」

囁いて、笑顔の余韻を残したまま、トキは去っていく。
その間際に、足を止め、振り向き、こう放つた。

「あなたの笑顔は、…………。ま、それでいいか」

恥ずかしがりながら、トキはポケットに両手を突っ込んで、廊下
を歩いていった。

つや子の知らぬ間に、鳶渡の対価は、支払われた。

それから一日後。

トキはつや子の病室を前にして、名札が入れ替わっていることに
気が付き、黙祷を捧げることになった。

もつ、死に顔は見なくとも、日に映る。

人生という名の道のりを突き進み、その終着を知つてしまつた者
には、その果てが、どのように見えるのだろうか。暗鬱が立ち込め
る異業な姿か、或いは、見ているだけで笑顔が綻ぶ、恍惚な姿か。

契機を終えた篠原 つや子は、狭間で何を見たのだろうか。

3・1（前書き）

第参話【罪の底】（シニノソロ）では、一部残酷な表現を用いますので、苦手な方は閲覧の方をお控え下さい。

その日、トキは自室を煙草の煙で覆っていた。白い靄が漂つ中、トキの三白眼は本来の使い方と言わんばかりに、睨みが効いていた。田の前に、畳みの上に直に座る男、名は野々垣ののがきけいいち慶一。

「「ほっ…」

野々垣はあまりの煙たさに不快そうに咳を払っていた。しかし、肩はまるびを帶び、全身は身体の中心に集められたように萎縮していた。

野々垣の全体の印象はひ弱というものの、腕や肩にあまり筋肉が張っていない、男らしさのない身体つきである。顔も地味なイメージが強く、特徴としては小さな目に、厚い唇だけである。髪型も遊びのない黒のスポーツ刈り。年齢20代半ばを刻むが、頼りなさだけでは10代にも及ばない。

座に構えたトキに、野々垣は顔を上げられずにいた。トキは口から煙を吐き出し、田を細める。

「もう一度、話を聞かせてくれ」

野々垣は声にビクリと肩を上下させる。

「……で…すから…え…えと…」

「口」もつた話し方に、トキの不機嫌は募る一方。

「もつと、声を張ってくれ」

「で、ですから…。と、薦渡で、僕のしたことを、なかつたことにして欲しいんです！」

意を決し、声を大にして響かせた野々垣に、トキは畠みを殴打する反応をさせた。

「ふざけるな…ッ！」

苛立ちは最高潮。今にも立ち上がり、野々垣を殴つてしまいそうな程。

トキが何故、これほどまでの剣幕で怒りを露にしているのか。それは野々垣が犯してしまった、罪が原因。

「な、なんでだよ。無かつたことにしてくれたら、あの子だって…！」

野々垣は慌てた拳動で視線を泳がせて言つが、トキは容喙を挟んだ。

「無理、なんだよ」

「え…？」

「死んだ人間を蘇らせることは、無理なんだよ
トキはその瞳に野々垣の顔を入れ、そう断言した。

野々垣の犯してしまった罪。それは殺人。

しばらくして後悔した野々垣は、その殺人を無かつたことにして貰うために、トキの処まで赴いた。しかし、現実は往々である。

「無理つて…なんで…」

トキは己の頭を強く握り締めた。

「鳶渡というのは、過去を変え、現在に波及させる力だ。死んだ者は、鳶螺と呼ばれる、現在と過去を繋ぐ糸が、無いんだ。そのため、過去を変えても死んだ者にその情報は行き渡らない」

三枚の紙に例えるなら、死んだ者は、現在の紙が消え去っている状態である。過去は現在の映しであり、鳶渡は過去を無理やり変える力。そのため、現在の紙がない者の過去を改变したとしても、透かしが出来ない、つまり改変が行われないのである。

「じゃ、じゃあ…もしあんたが過去に行つて、僕を止めたとしたら、どうなるんだ？」

「……お前が人を殺すのを俺が止めたとすれば、現在は改変され、

?お前（野々垣 慶一）は誰も殺していない？ようになる

「……？」

野々垣に疑問が満ちた。何故なら、トキの説明では、矛盾が存在するからだ。

野々垣が人を殺していないとすれば、被害に遭つた者は、被害に遭つていないことになるはずなのだ。つまり、殺人が起きていない状況では、誰も死んでいない状況でなければならない。

しかしトキはこう言っていた。

死んだ者は蘇らない

疑問を軽減させるために、トキは己から話を進めていった。

「……鳶人が過去へ渡ると、目につく異業な形のモノ^{なり}が居る。それは黒穴と呼ばれている、黒い穴だ。コイツは、不合理の匂いを嗅ぎ分け、不合理を肅正するモノ」

その説明では野々垣には伝わらず、一つも疑問は払拭されなかつた。トキは続けて語る。

「例えば、AがBを殺害したとして、鳶渡を使い、その事実を変えたとしよう。Aは殺害犯から一般人に、Bは被害者から…死者へと変わる」

「死者…？」

「そう。黒穴は、不合理な改変が行われた場合、Bの魂を喰らうことで、死の概念を守り通す。人には未来の時間軸は存在しない。言い方をえれば、運命など無いということ。だが、この事象にだけ関して、運命が作成される。この今という現行世界で死んだ者は、過去でどう上手く生かそうが、現行世界での死亡時刻が訪れた時、黒穴に魂を喰われ、死ぬ」

鳶人には、過去の時間軸が内包されていない。つまり、鳶人が存在する時間軸というのは、現在ということ。時間軸の中の最先端である。

何故、鳶人が帰化により過去世界から現行世界へ正確に帰還できるのか。

それは、帰化という力は、対象者の鳶螺を渡るものでなく（人の鳶螺への侵入は一度切りの片道切符）、過去から現在へと流動する時間軸の川を渡るものだからである。そのため、終着点が決定付けられているのだ。

つまり、終着点に存在する人々には、一秒先の未来の時間軸さえ、存在しないということである。あるのは想像、想定、予測、予定といふ、必然性の無いものばかり。

トキが美登理に鳶渡の説明の際に用いた3枚の紙の中、2枚しか紙を使わなかつたのはこのためである。有るようと思えて無いもの。薄い可能性、それが未来。

そしてこの死のみに加算される理。じとわり

【死】だけは格別。死んだ者は、どう抗おうとも、死する。

己の生命力の衰退で。人の手で。偶発的な病気や事故。如何な要因であろうと、死した者は蘇らない。

鳶渡によつて、死の要因を如何に排除し、生の道を切り拓こうとしても、死は曲がらない。

理を曲げようものなら、黒穴が魂を喰らうのみ。

野々垣の頬に、汗が滲む。

「ぐ、喰われたら…どうなるんだ」

トキは煙草の煙を吸い込み、顔を横に向けて答えた。

「……表向きには突然死という死因になる」

「……！」

その時、確かに野々垣の瞳に、希望が湧いた。

「それって……やつぱり……。それで！ それでいいじゃないか！」

喜々に富んだ明るい声が、トキの耳を劈いた。

この淀んだ空間にあつてはならぬ、似つかわしい希望の光。それを煌々と全面に出す、野々垣。トキの開かれた目は、軽蔑の眼差しへと、姿を変えていった。

「それで……いい？ 何が言いたいか、分からんな」

これは試しではない。要求。野々垣に、それを口に出して欲しくなかつた。

殺人犯である野々垣に、それを口に出して欲しく、なかつた。しかし、希望を目の前にした人間とは、狂つたように、壊れたよう、追い続ける者である。

「だから！ それでいいじゃないか！ 突然死！ 僕が殺した事実が無くなつて、突然死になる！ それで――

!-----!

轟音が響いた。いや、正確にいうなら轟音ではなく、鈍い音。しかし、狂つた者を一撃の下、黙らせるに相応しい音ではある。それが響いた。

トキの右手から浮き出る血管。拳型に凹んだ畳。そして、噛み締められた奥歯が鳴らす、怒りの音。

野々垣の背筋が、冷たく張り詰めた。

「ふざけるなよ……ツ」

その言葉を機に、脳がすうっと消えていく感覚が訪れた。野々垣

は田の前に座る鬼面を前に、捕食される者の立場を、強制的に感じさせられた。

「それでいいって、何なんだ？　お前は、何をした？　それでいいなんて言葉で括れるほど、軽いことをしたと思ってんのか！」
これはもう、憤慨というモノではなくなつていた。最上級の、厭きれ。目の前にいる野々垣に対する、厭きれ。同時に、悔しさが込み上げた。人間という卑しい生き物に対する、悔しさが。
「お前は自分の犯した過ちを、まるで、一切、微塵も、背負おうといしないんだな」

それでいい。

自身の手が汚れず、世間に非難されることも、人間的立場を失うことも無く、人一人の命を奪つたことから、逃れられる。

だつたら、それでいい。

殺された者の末路など、眼中に無く。

それでいい。

全ては自分。

だから、それでいい。

トキは　、

「肩が　！」

？それでいい？で終わらせる事など、許さなかつた。

激昂の一喝を放ち、血の氣の引いていく野々垣を睨み据えるトキ。

「……なんでだよ」

野々垣の口が小さく開くと、もう既に漏れていた。

「なんでだよ。確かに、僕は人を殺してしまった。その家族に恨まれるのも分かってる。けど、さ。その、いや……でも、ずっと、恨んだままってのは辛いはずだろ！」

焦りや不安が原因で、統一されていない脳から出てくる言葉は拙く、何を言っているのか、理解に苦しむものであった。しかし、トキにはその意が伝わっていた。

「お前は、自分が救われれば、被害者の家族も救われる……と、言いたいんだな」

「す、救われるとは言つてない！　けど、もう生き返らせないって言つなら、丸く收まる方を、選んだ方が！　恨むつてことは、忘れられないから！」

野々垣は必死に訂正し、己の意見を得手勝手に吠えた。それが人を逆撫でにする行為であることを忘れて。

「……そつまでして、逃れたいのか」

野々垣の言い分は、殺人には恨みが発生するが、自然現象に近い突然死には、恨みが発生しない。ということ。恨みとは怒りから来るもの。怒りとはその矛先を誰かに向けるもの。それを受け続ける者がいる限り、被害者は報われない。そういう想いが募れば募るほど、人は哀しみを背負い続ける。その背景を無くせるのが後者。突然死にすること。

「……だって！　殺す気はなかつたんだよ！　会社で上手くいってなくて、それで……！」

「凡庸な言い訳で、人の心は動かない。

「それで、何の罪も無い人の命を奪うことに繋がるのか」

野々垣の頭は、諦めるように畳みに向かった。

「魔が差したんだ……いや、もう耐えられなかつたのかもしれない。この衝動を抑えるのが……何か壊さないと、殺さないと、耐えられなかつたから」

拳に、力が宿っていた。

トキは冷酷な眼をしていた。同情などという感情は、微塵も込み上げてこなかつた。

「お前は、氣弱そうに見えて、傲慢なんだな」

「僕が、傲慢?」

「会社でどんな失敗や人間関係の不満があるつと、そこから生まれるストレスを?人にぶつける?というのは、お前が驕り高ぶつているのが原因さ。お前は、無意識かなんか知らんが、人を見下さねば気がすまないんだよ」

「違う!」

「違わないさ。これはお前の本質だ。まあ、大概の者が持つ、思想でもある。誰かの上に立ちたいという希求は、多くの者に根付いているからな。誰も下を向いて歩き続けることはしたくない」

「……」

「しかし、?そつしなければならない?といつ障害が必ず付く。お前はそれを超えずして、ハ当たつたのさ。もつと下の立場の人間に。自分が上だと知らしめるように」

野々垣が氣弱な人間であることに、間違いはなかつた。

本心を口に出すことを嫌う性質なため、会社では上司の鬱憤を晴らす的となつていた。小さなミスでも延々と説教を喰らい、無駄と思われるほど目をつけられ、嫌がらせのような毎日を与えられる。初めの頃は、同僚も野々垣に同情をしていた。が、あまりにも長い期間、野々垣だけが説教を喰らうために、?野々垣は頻繁にミスをする使えない奴?という意識が、徐々に社内に蔓延つていつた。結果的に野々垣は孤立。味方であつた同僚にさえも、侮蔑の扱いを受ける始末となる。

不満の増長は急速化。胸の内で憤慨するも、口に出さない。外に出さない。ただ溜め込む、溜め込む。

そうしていくと、人というのは世界全体に対して、悪態染みた意

識を持つようになつていいく。普段、田に付かぬ「ミヤマ」や吸殻、迷惑を顧みない人々の生活。それら全てを否定していく。

死ね

お前ら何か、消える。失せろ、邪魔なんだよ
ゴミ同然のお前らが、何故自分よりも、幸せそうなんだ
野々垣の意識の中に生まれていく、不徳な塊。
それを内の中だけに留められなくなつた時。
爆発する。

自身の欲求を満たす、最高の形へと

「違う……」

咆哮を発した野々垣の全身は汗ばみ、小刻みに震えていた。首が据わらない感覚。目の前の男が、自分の要求を呑む気が無いといつ、絶望感。

「違うなら、どうだって言うんだ。まあ、何を託つても、人を殺すに相当する理由など、存在しないがな」

田の色を変えないトキは、もう見限っていた。どう繕つても、どう謝罪しても、それは全て己のため。野々垣はそういう男。自身が手にかけた者への罪を背負おうとしない甘つたれ。鳶渡などというレベルでなく、会話をえ億劫となつていった。それほどまでに、トキの激情は鎮まることを覚えなかつた。

喉に蓋を閉められたと思えるほど、息苦しく、何も発せられなくなつた野々垣は、悲愁に沈んだ。

そんな頃合に訪れた、野々垣にとつての希望とも言える音が、トキの一室に響いた。

玄関扉の開く音。

トキはノックも無しに入つてくる無法者を確認する。そして田を開かせる。

「加室の旦那……何を?」

凶々しく、トキの部屋へ上がってきたのは、加室。口の端は持ち上がり、悪い顔をしている。それを田にする野々垣の田は、死んでいるようなものだった。

加室はトキの質問に答えることなく、ずんずんと畳まで進んでいった。そして、その嘲るような口元から声を出す。

「よお、話は扉越しに拝聴させてもらつた」

そう言つと、加室は膝を折つてしゃがみ、野々垣の目の前に自身の厳つい顔を持つていった。野々垣は何だと後ろに仰け反る。そして、加室から発せられる言葉に、さらに身体を仰け反らせる」となる。

「俺に、依頼しねえか？」

「え」

野々垣の驚愕の表情。

トキの田は、信じられないモノを見る田に変わつた。

「田那、何を言つている」

急速、繕つたような下手な冷静な声。加室の口の端が大きく広がる。そして肩越しに、眉と口を曲げ、嘲弄した表情でこう答えた。
「だつて、可哀想じやねえか、反省してゐつてのに、突き放してばかりじやな」

トキの繕いは簡単に消え、沸々と込み上げる怒りが蘇る。

「どこが反省しているつていうんだ！」

「トキ、黙れよ。お前はこの件は乗り気じやないんだろ？ なら俺に遣せ。否応無く、俺に遣せ」

加室の嘲た顔は一瞬にして強面なものとなり、棘の張つた言葉は、恫喝以外、何者でもなくなつていた。

「……」

トキは諫言することもせず、言われるがままに沈黙した。

加室は黙つた様子を見ると、顔を野々垣へ向き直した。

「つーこつた。お前を救つてやるよ」

話から、加室も薦渡使える者だと勘繰つた野々垣は、明るい顔になつた。

「ほ、本当ですか！？」

「つつても、タダじやない。10万。それでお前の人生を救つてや

うひ

「たつた、10万で。……はは、ははは」

予想とはあまりに別の小額の要求に、野々垣は笑つて見せた。希

望に満ちた笑いを。そしてトキを見た。少しひに頼るのが馬鹿だつたと、煽るように。

「10万、出せるのか？」

「ええ！ お願ひします！」

「いいだらう。鳶渡を売つてやろ？」「

トキはそのやり取りを見て、蔑むような目つきになつた。しかし決して容喙することはしなかつた。加室はそれに気づいたが、直ぐに視線を切つた。そして立ち上がり、野々垣を見下ろしながら話を再会させる。

「だが、まあ、俺は鳶渡が結構下手でな、お前がやつちまつたもんを、事細かに訊かねーとダメなんだわ。辛いことを思つて出させちまうが、いいか？」

苦い顔をする加室。野々垣は少しだけ目を伏せて了解する。

「え……ええ、構いません」

返事に、加室の片頬が一度だけ持ち上がる。

「うし、じゃあいくつか質問すつから、包み隠さず答えてくれ。まづ、お前の名と出身地」

「の……野々垣 慶一。出身は 県の 市」

「誰を、何時、どこで殺害した？」

「……名前は解らないが、女の子を……、7日前にT町の雑木林の中で……」

「その子の歳は？」

「正確には解らないが、13、14くらいだと……」

「ん？」と加室の脳が取つ掛かりに引っ掛かる。

「解らないのに何故、そう言える？」

「中学の制服を着ていたから……」

「制服を着ていたということは、犯行時刻は下校時刻か？」

「はい……、4時過ぎだった……」

「帰宅途中のその女の子に、何をした？」

「T町のM中学の雑木林に……口を塞いで連れ込んで……」

「連れ込んで？」

「喉で唸るから、頭を殴つて気絶させた」

「それから？」

先を進めると、野々垣は口を籠らせた。言いにいく内容なのだと誰でも勘付く。

「……服を脱がした」

野々垣はそう言つと、視線を斜め下へと追いやつた。加室はそこで、一度だけトキに視線を当てる。が、直ぐに逸らした。そうせざるを得なかつた。トキは静止していたものの、その形相は狂氣を感じさせるものだつた。憎しみといえる感情の波が、激烈を伴つて渦巻いていた。

加室は頬に一筋の汗を流して、「……そして？」と再開させる。「そ、それ以上のことはしていない！　ただ、顔を見られていて、恐くなつたから……」

「……」

加室は押し黙つて次を待つた。

「学生鞄を頭に被せて、用意していたカナヅチで…殴りつけた」「被せたのは、返り血が付着しないように…か」

「……」

言い当てられ、野々垣は無言といづ答を表した。

「何度、殴りつけた」

「な…七回だ…。今でも手に感触が鮮明に残つてゐる。最後は仰向けに倒れたところを、顔を狙つて振り下ろした。鈍い音がした。何かが弾けるような」

そう語る野々垣の瞳が、徐々に感情の流れを汲み取り、生死の間隙を突いた記憶から映像を抽出した。目に映るものは、畳ではなく、無残にも頭部を碎かれ、被せられた鞄から血を滲ませる、一人の少女。

「……そのカナヅチは、自分の物か？」

加室の冷静な声に、野々垣は我に返る。

「……ツ……はい」

加室は変化に気づいていたが、別に問ひことはせず、淀まず続けた。

「凶器はその後どうした」

「家にまだある」

野々垣が答えると、加室は時間に間隔を空けた。そして、重く口を開く。

「最後に、罪は感じているか?」

「……馬鹿なことをしたと思つていて」

野々垣は下唇を噛み締めた。加室は口を開じた。

「よし、着いてこい」

「え?」

何故、といわんばかりの表情に、加室は答える。

「……で使ってもいいが、嫌そうにするやつがいるからな」

そう言いながら顔を動かし、視線をトキに集めさせた。トキの身体は激情から総毛立ち、震えていた。感情を押し殺そうという気概など疾うに消えていて、次に感情を刺激することを吐けば、何を仕出かすか判らぬ、未曾有の気配を醸していた。

これ以上、野々垣という火種を置いていては、導火線を燃やし尽くしてしまい兼ねない。野々垣もそれを承知し、震える足に説教を食らわし立ち上がった。

野々垣にとつて、最悪なのは、トキが警察に連絡し、薦渡が行なわれる前に捕まってしまうことだ。それを避けるべく、野々垣は何も文句を言わずに、そそくせと出て行く。

加室は立ち止まり、「悪いな」とトキに告げ、部屋から出て行った。

アパートの前には乗用車のクラウンが止まっていた。加室は運転席に乗り込み、野々垣を後部座席へ搭乗させた。

「……」

後部座席に座った野々垣は、直ぐに違和感を覚えた。

車内の装備が一般的の其れとは異なっていたからだ。オーディオスペースに納まっている機器のボタンには4秒・8秒や手動、サイレン停止など、見慣れない文字が記されていた。助手席のコンソールボックスにも様々な機器が取り付けられていて、目を引くのは電動カミソリのような形をした機械であつた。肘置きのスペースにはマッサージ機のリモコンのようなモノまで設置されている。

「あの……」

野々垣はそれらに対して質問をした。

「その機器は一体？」

「ああ、俺の趣味でね。最新機器に目がないんだよ」
加室はそう言つとキーを捻り、エンジンを稼動させた。そして間を空けず、アクセルを踏んだ。

機器の詳細な説明が一つも為されない加室の応対に、ドクンと、妙な心音が野々垣の内に木霊した。

「あの、どこへ向かうんですか？」

「ああ、鳶渡つてのは人目に付いちやいからな。だから人気のない場所に」

「はあ……そうなんですか？」

野々垣はそう相槌を打つたが、やはり胸の靄が晴れない。加室の答えが質問の回答ではないことが心配の種。この男の癖のようなものなのだろうかと考えを煮るが、付け焼刃の逃避の気がして、さらに靄が深まる。

どこへと訊いたにも関わらず、曖昧な？場所？といつ答え。過去

の改变という稀有な現象をはした金のような10万円で請け負う。一番の難物は、扉越しに話を聞いていた?ということ。

まるで、予め、野々垣がトキの処へ赴くのを、知っていたかのよう。

覚束なくなつた野々垣の心中は次第に荒れ始めた。ぐるぐると、またはくちやくちやと腹の中が蠢く感覚が襲う。憂慮に耐えられなくなつた精神が、蝕み始める。

杞憂であれば問題ない。

「あの

「そういう思いで開口するが、加室の声に上書きされる。

「野々垣、こういう話を知っているか?」

見越したような具合の良い時機。

杞憂であれば、問題ない。

「……」

「罪に、深さがあるつて話、知っているか?」

野々垣は加室の顔が映り込んでいるバックミラーを見た。粗忽な男だと思っていた野々垣は、その顔を見て青ざめた。

斟酌など一切ない、尖鋭な眼。無表情に固まつた顔の筋肉。その口から発せられる、重く、聞いているだけで喉が痞えそうな言葉。

野々垣は、「あ…」と情けなく漏らした。

「犯した罪によって、深さつてもんがあるんだ。その中の最下層。解るか?」

加室は、もう野々垣のことを気にすることを已めていた。

「解らないのか?」

訊くが、それはもうただの責めであり、答える余地など、野々垣に与えていなかつた。

「そうだよな。今のお前には、そんな深さなど見えていよいよな」野々垣は、頭を横に振った。それは加室の言葉によつてではなく、今という現実を否定したいがため。違う、違うと脳が叫ぶ。

「最下層に墮ちるクソな罪つてのはな」

加室はハンドルを左に切つて、縁石の横へと車を着ける。やめてくれ、やめてくれと、野々垣の口だけが動く。

そしてブレーキが踏まれ、天敵が振り向く。

その者の表情は、先ほど見たトキの激昂の表情と、相違なかつた。

「善良な市民を、殺すこと……ッ！」

色を成した一声に、野々垣の顔が歪む。

「騙…したな……」

野々垣は全てを理解させられた。現状が、終わつていることを。加室の口元が、悪く伸びてゆく。

「俺が鳶渡使いだというのは、騙していない。ただ、それが副業だつてことだ」

「ほ、僕の口から話したという証拠がない…」

野々垣はシーツに背面全てを預けるほど、退いていた。逃げたいという本心が起こす行為。現段階で野々垣は逃げる術を幾つも持っている。

手足の拘束もなく、後部座席という位置。その気になれば、車から降りて走り去ることも出来る。加室に暴行を加えることも出来る。が、両の足は完全に機能停止していた。脳が逃げるという選択肢を排除。ただ居座り、怯えるということを強制する。ある種の放心状態。

それはこの上なく不利な状況下が起こす、必然であつた。抵抗のし甲斐もない、圧倒的な絶望感。それに直面した時、人は動けなくなる。

「そんなもんじゃ逃げねえよ

加室は「一トのポケットから細く小さな機器を取り出した。

「最近はこいつ、録音機つてのがあるらしいよ」

野々垣の目が見開いた。

「最初から……！」

そう発すると、心身が焼かれるような感覚に見舞われた。胃から胃酸が込み上げ、喉を襲う。手足が異常なまでに震え、抑えが効かなくなっていた。目頭が熱くなり、ボロボロと涙が野々垣の上着に垂れた。

暮れ行く者に、加室は変わらず言葉を紡ぐ。

「その通り。お前はハメられていた。最初から、今の今まで、ものの見事に、想定通りに」

野々垣に救いは無かつた。救われるべきではないと、神に告げられたようにさえ思える。因果応報。自らが犯した過ちは、自らに返ってくる。自分で救われるなど、在ってはならぬ理。

トキも加室も其れを重々承知している。それを曲げることは、薦渡を使う者にとっての、禁忌。しかし縛りはない。当事者の判断によつて、この禁忌は簡単に解ける。つまりは、トキや加室の匙加減でどうとでもなり得る事。

「てめえに同情の余地なんてない。罪を背負わず救われるなんざ、虫が良すぎるんだよ」

加室が背負うのは、黄金色の旭日章。野々垣が背負うのは、婦女暴行、殺人罪。そして向かうは、冷たい監獄の中。

* * *

トキはアパートの前に佇んでいた。息を残す心火の目が見つめる先は、加室たちが去つて行つたであろう方角。煙草を取り出し、煙を吐く。

そんな折りに、後ろから声を掛けられる。

「どしたの？ 黄昏ちやつて」

トキは声を掛けてきた者を肩越しに見据える。

「ああ、ちょっとな」

トキは美登理を視界にいれ、優しく微笑んだ。美登理は頭を少し傾かせながら、トキの肩に並んだ。

「なんか暗いわね」

「……ちょっとな」

あしらひょううな返しに、美登理はそいつことね。と小さな息と共に胸の内に落とした。

その気遣いに、トキは少し眉を曲げた。てつきり図々しく言及していくると思っていたらしい。

トキは横目で美登理と視線を交わすと、煙草を一度だけ吹かせた。

「……鳥子はまだ、親父さんのこと、恨んでるのか？」

唐突な問い掛けに、美登理は目を丸くして静止したが、直ぐに口を開いた。

「……そりやね」

そしてトキから視線を切つて、地面を見つめる。

「ま、復讐つて気はなくなつたけどさ、怒りはあるよ。例え頭が地面にめり込むくらい土下座されたって、許す氣ない」

そして、またトキを見つめ直し、にこやかな笑顔を作つた。

「でも、許さないなりにも、度が過ぎたらダメかなつて」

あの屋上の時と同じ人物に感じられない、明るい美登理の様相。

トキは眼を閉じて、口の線を広げた。

「そうだな」

人の変わり様。それは成長でもある。それを間近で感じ取れるのは、光栄なこと。

「親父さんが仕事を優先する理由、どう思つてる?」

「んー…、ちつさい頃は好きだから。今となつては…私たちのために、なのかなつて思うかな」

「……うまくやつていけそつだな」

トキの意味ありげな物言ひに、美登理の眉が曲がる。

「どういつ意味よ」

「人を理解するのは難しいことだが、大切なことだ。鳥子はもう、それを疎かにしないだろ」

そしてトキは後ろを向き、「だから、うまくやつていけるぞ」「ひめ」と付け足して、自室へと戻つていった。その姿を呼び止めず、美登理は微笑み、ボソリと呟いた。

「飛ぶ方向、気づかせてくれたのは、あんたよ」

凡愚であればあるほど、人の心を解ろうとはしない。
自分勝手に歩き続けるだけ。

置いて行かれた者たち。蹴飛ばされ、死した者たち。

その者たちの心を、解ろうとはしない。

しかし、少しの弾みで心は別の方向へと飛んでいく。その着地点はその者の想いにより様々に変化する。

野々垣は、解ろうとしない人物。だから解らせる必要があつた。それは罪を償うべき時間の中で、見出していくしかない。
罪の底への墮ち道は、無情の心が為してしまつ。

それを変えることが出来るのは、己の意志と他者の心。

これから野々垣 慶一は、多様な心を味わうだろう。他者からの怒り・悲しみ・憎しみ、そして愛。それらを受け止めた時、野々垣の心はどこへ向かうのか。それは判らない。

ただ、トキは願つた。美登理のように、あつて欲しいこと。

4・1（前書き）

第肆話【宵の涙】（ヨイノナミダ）では、偏見や差別的暴言が用いられます。不快に感じる方、苦手な方は閲覧をお控え下さい。

ザツザツザ

古ぼけながらも外見だけは現代風の装飾を帯びたアパートの前で、私服の上にエプロンを重ね着した若き大家が、竹箒を手に、落ち葉の掃除を行なつていた。

「いい天気ねー。もっと空気が綺麗だとなあ」

そういうて朝の空を眺める。雲ひとつない晴天であつたが、空気が悪く、どんよりとしたイメージは拭いがたく残る。

そうして、ある程度の掃除が完了した時、105号室のドアノブが回転し、中からトキが現れた。

「お」

トキは美登理に気付くと側に近寄った。

「よつ。りしこ」としてんじやねえか」「

声に振り向き、美登理は頭にハテナを浮かべる。

「らしこつて……？」

「大家らしこつてことだよ」

「あんた、漫畫の読みすぎじゃない？」

「んなことねえよ。敷地の管理も大家の仕事なんだしよ」

美登理はトキの話をあまり耳に入れず、ため息をついた。

「この格好については、触れないの？」

そういうてエプロンの裾をピラリと摘み上げた。トキはその姿を見て、ふむっと考え込んだ。

「ん……何だかエロいな」

美登理の右田の田尻が持ち上がつた。

「あんたねえ……もつところ、似合つてるとか、可愛いとか、そんな風に言えないの？」

「あれ、エロについてそーいうの今までないのか？」

トキの中ではかなり上位の褒め言葉だつたらしい。呆れた顔になつた美登理のため息は深さを増した。

「单なるオヤジね……」

言いもつて、美登理はトキの格好に気付く。黒無地の長袖Tシャツに薄いジーパンは普段通りだが、一つだけ加えられた物があった。それは手に掛かっている鞄であつた。こげ茶色をした革製で、一本手のA4ファイルサイズのビジネスバッグだ。

美登理はそれを見て質問をする。

「どうか行くの？」

「ん、ああ。ちょっと遠出せんとならんようになつてな」

トキは鞄を片手に肩に掛けた。

「それって、旅行つてこと？」

「んー……まあ、そんなところ……か」

渋りつつトキが答えると、美登理はパアッと明るい雰囲気を全身から放出した。

「私も行きたい！」

ウキウキという晴れやかな気分に満ちている美登理。トキは気まずそうに左の頬を指で搔いた。

「すまんな、一応仕事でもあつから、遊びじゃないんだ」

一緒に行くことは出来ないと暗に告げる。そうすると美登理の先ほどの空気が一気に褪めていった。色に例えるなら赤から青へと、まるで色素が消えて反転してゆくよう。

あからさまなほど落胆している美登理に、トキは「また機会があれば、そん時いこうや」と頬を持ち上げ披瀝した。

「んん。……分かった」

美登理は不満がりながらも、一応自分と行くのを敬遠しているわけではないという述懐をされたこともあって、強気に言えず、素直に聞き止めておくこととした。

トキは「じやあな」と片手を上げ、アパートの敷地から姿を消し

ていった。

美登理は空を見上げ、「どつか…かー」と脳内を活動させた。

* * *

トキは緩やかに進む電車の窓の淵に膝を置き、頬杖をついた。そして一枚の書簡を鞄から取り出し、胡乱な目つきをした。

「何とも怪しい匂いがするなあ」

便箋の中身はあまりに質素なもので、名前と住所、そして依頼を催促する一筆のみ。連絡先や、どのような依頼なのか、対象者はどのような状態なのか、その他諸々一切、何も記載されていない、あまりに身勝手な書簡であった。

このような胡散臭い依頼状に、トキが腰を上げた理由は、シズクの関与がない。ということであった。シズクの関与なし、つまり紹介人の無い空手な状態で、鳶渡にたどり着いた依頼主の力量や必死さが気になっていた。裏を返せば、鳶渡を受ける対象者がそれほど切迫した状態であるということ。藁を摑む想い。そうでなくては鳶渡という非現実的な力を享受しようとはしない。もつと現実的且つ効率的な方法を模索するのが先決。それを放つてまで鳶渡に情報を注いだとなれば、？鳶渡でなければならない？という理由が存在する。トキが腰を上げるに迷いはなくなる。

だが、思考を突く不可解な感覚。

奔走しているであろう者が、あまりに質素な内容の文章、言葉足らずな文章を送つてくるだろうか。

（諸々書くことを忘れちまうほど…ってことなのか。或いは…）

トキの考えとして一分される想定。一つは書き手が狼狽し、文章の推敲が図れなかつたということ。こちらであれば後の労はあまり無い。しかし、もう一つ、精神的に既に参つている状態。濃い文章

を好みず、薄く薄く、血の通わない文章を好む性質であつた場合、危険が増す。言つなれば自殺を図る美登理と同色。扱いににくい存在となつてゐることである。

「まあ……いいか」

トキは考えを煮るもの、勝手な想像であるがため、保留を選んだ。直接本人に会つて確かめた方が手取り早い上に狂いが無い。そう結論を出し、息をつき、窓の外へと目をやる。

コンクリートや鉄筋が目立つ風景から、徐々に青々しさが増え始めていく。忙しないという印象強い街から、穏やかな町並へと変わつていく様は、現代でなければ見れることの出来ない特別な眼であろう。

「やつと着いたか」

トキが目的の駅に到着したのは、アパートを後にしてから5時間後のことであつた。駅構内から見渡す風景は、辺境の地とは呼べないまでも、敷き詰められた田畠と水路、昔ながらの瓦屋根の木造住宅が立ち並び、田舎。と、呼ぶに相応しい場所であつた。

トキは腹の具合を手のひらで確かめた。なかなかに虫が食を求めているようで、小さく鳴いていた。

改札を出て、駅前に何かないかと辺りを見渡す。駅前だけあつてか、店はちらほらと佇んでいた。まるで規模の小さな下町のようだ。腹の虫と相談し、足はきし麵の立て札の掛かった店屋へと歩み進む。

「じゃまするよ」

暖簾をぐぐり、カウンターへと席を置く。

年老いた男の店主は暇そうに新聞を呼んでいたが、トキが来店したのを機に、慣れた様に新聞を放り、冷やの入ったコップをカウンターに置いた。

「らつしゃい。ご注文はお決まりで?」

トキは鞄を隣の席に置きつつ、「ここの一一番人気は何か」と問

う。

「それだと、海老と穴子の天ぷらやね」

「ほお。じゃ、それで」

「分かりやした」

注文は早々に決まり、店主は調理に取り掛かつた。長年培つてきた流れのような工程を見ながら、トキはこう繰り出した。

「ここいらで、唐櫃からとっていう家がどこにあるか知つてるかな」

店主は顔を上げた。何ともあっけらとしている。

「唐櫃つていえば、ここいらじゃ有名だからねえ。誰に聞いたって知つていいやだ」

「じゃ、道筋とか聞いてもいいかな」

「最近の若者なのに、なびいは使わないのかい？」

「そういうのに疎いんでね」

「なら、自慢の海老穴子天きし麵を平らげたら外に出て教えてやりやしちよ」

「トトリと湯氣の立つ丼がトキの前に置かれた。

「じりや、美味そうだ」

トキは頬を綻ばした。大きな海老が一つと、丼に橋を架けている一本穴子。きし麵の姿はもの見事に隠れていた。無意識に唾液が溜まり、世辞はなかつた。

トキはがつつくようにきし麵を食い始め、容易く平らげてしまつた。そして感想を一つ。

「美味い」

店主は照れくさそうに鼻を搔いた。

「へへ、伊達に1800円はとつてないからね」

「これで1800なら値打ちがある」

トキは財布から珍しすぎて存在を忘れがちな2千円札を取り出した。店主は使いにくい!と胸の内で我鳴つた。

「で、真っ直ぐ進んで行けば、でかい屋敷が見える」

店を出たトキは、店主に唐櫃邸までの道筋を聞き入れた。

「なかなか足を使わんといけんのか」

トキは道を見据えて渋った顔で言った。店主は笑いながら「なあに、ここは田畠が広がる農業地。軽トラでも捕まえればいいや」と住民ならではの案を出す。トキは頭をガシガシと搔いた。

「うーん……まあ、景観もいいし、ゆっくり歩くとするよ

「兄さんの足なら一時間くらいだらうし、それもいいかもしれんや

ね

「じゃ、帰りに腹が減つてじゃまた抛らせてもうつ

「楽しみに待つてやす

トキと店主はお互いに手を振り合つた。

プロロロロロ

店主が言つてはいた通り、舗装されていない土づくりの道を軽トラが頻繁に走つていた。運転手は珍しそうにトキを見ては、横を通り過ぎていく。

土埃が舞つては、トキは口から煙草を離して咳を払つた。

「俺の喉を潰す気かよ」

あまりの不快さに愚痴が零れる。

そうじつして辿り着いた場所は、野山と隣接している一軒の家の前。

その家は、この田舎町の情景に合つてゐるようで、浮いてゐるようさえ感じほど、由緒溢れる古の骨頂のお屋敷であつた。

高さが5mはある石壁に囲まれた屋敷周り。その丁度中央に、墨のように黒い、重厚な木製の大門が佇んでいた。その雄大な姿は、開けることが出来ぬ、開かずの扉のような重圧をトキに植え付ける。

「確かにこりや、有名になる」

トキは門の鼻先まで足を進めた。

黒に埋もれていたため、遠目からでは氣付くのが困難であったが、大門の左手には小門があつた。そこから屋敷の者は出入りしているようだ。呼び鈴が見当たらない為、トキはその小門に腕を振るつた。すると、予め門の前にいたのではないかと疑うほどの早さで、「お待ちしておりました」という返しを、淡泊な声で門が発した。そのまま後に、門が開いた。

ぐぐると、地味ながらも氣風溢れる和服に身を包んだ女が一人、立つていた。

着物は黒の下地に筆で引いたような、赤く太い線の模様が特徴的。一見しただけで極上の織ということが判るほどに美麗であった。

女の姿は程よく白身の肌に細身の身体。顔の造形は特徴的なシユツと細い鼻に、薄く小さな唇。一重の眼。腰に届く長さの黒髪は、手入れが行き届いており、極上の艶美さを醸し出していた。

歳も三十そこそこで、幽艶に映える女性であった。が、奇妙な雰囲気があつた。空気が冷めていて、熱が此処に在らず。いや、既に燃焼し、煤けてしまったよう。そんな灰の心を内包している印象。

女は、トキが何かを言つ前に深々と頭を下げた。

「唐櫃 宵と申します。この度は無理を通して貰え、深い感謝の念で満ちております」

情緒漂う雰囲気に、トキはあまり慣れないのか、隠すように頭を搔いた。

「鳶人の無代 トキだ」

「存じております」

トキはそりやそつかと胸の中で呟いた。

「いや、立派な屋敷で」

屋敷を見上げて言つと、宵は「ええ」と最初に打ち、「先祖代々共通の趣向なのですよ」と付け足した。

宵は人の背を優に越える玄関扉を開き、案内を始める。

中は広大であった。玄関は低価のアパートの一室よりも広く、廊下は運動会のリレーでも出来るのではないかと思えるほど、太く長かつた。

正面からでは判断の出来なかつたこの屋敷の規模に、トキは呆然と立ち尽くした。

「おあがりください」

何処を見ても手が込んだ作りをしていて、職人の本気が伺えた。いくつも立ち並ぶ襖は金模様の繡。欄間は杉の木で作られた極上のもので、彫りも青龍から玄武まで様々と、屋敷内は見ていて飽きぬ、芸術を意識した造りを重視していた。

廊下を歩く際に、襖の開いている部屋に目をやる。どにもかしこ

も一般の其れとは別格の広さをしていて、部屋には引き目鉤鼻の方式で描かれた人の姿を模した掛け軸。大小様々な壺。日本刀を鎮座しているところもある。トキは感心という胸中で一杯であった。たどり着いたのは秘奥と思わしき場所であった。玄関から一番遠く、人の行き交いが少ない場所だ。

「こちらです」

宵は戸襖を開いた。

ほのかな匂いがトキの鼻孔に流れれる。

(この独特で酸味のある匂い……尾州びしゅう：使つてんのか)

尾州とは檜の上の位の木材。檜よりも匂いが強く、美しい。というのも檜の節や目の綺麗な部分だけを切り落とした物だからである。

案内された一室は旅館の大広間はあらう広さであった。規模の大きな部屋で、トキは汗を流した。

その理由は、この畳の田園風景の上に配置されているモノが、部屋の中央に敷かれている、一枚の敷布団のみだったからだ。

豪勢な造りをしているこの屋敷で、掛け軸も壺もない、空白に近い空間は、違和感が思考を突く。

そして、異様なまでに締め切った障子の数々。障子紙は厚く耐性の強いもので、節々にシワの目のようなものが目立つ、雲竜が使われていた。

さらに塗ぬりが障子と並ぶように掛けられていて、光を殺していた。まだ昼過ぎだというのに、薄暗い部屋。

印象は一つ。

(徹底した外界との遮断……)

そうトキが考えた時、視界の下部の闇が蠢いた。瞬時に一步引く。

「人……？」

蠢いたのは人。

その者は畳に身体の前面を付け、畳みの淵に指を掛け、這うよに進んでいた。

トキは一目見て、異常を認知する。

這う者の両足が、左腕がないといふことに。身体はそのせいか非常に小柄に映る。髪は長く、身体を埋め呑んでしまう。そのため、この暗さではある種の迷彩となつていた。

宵が力強く発すると、由と呼ばれた這う者は、ビクリと身体を動かした。

見

「あーーあーー」

見ども無い真似はしないでと云ふ事だ。

宵は由を抱き抱えた。女性でも軽々持ち上がる様は不思議な光景に感じる。由はグッタリと身体を垂らしていた。着用している黄八丈柄の長襦袢を寝巻きとしているようで、シワが幾つも乱雑に織り込まれていた。

宵はさつさと敷布団まで由を運び、寝かし付けた。そしてトキをちらりほらりと窺う。不意を突かれた顔以外、何も変わった様子を見せなかつた。

立ち上がった宵は、伏せた手を曲に向けながら、土井に語った。
「……」『』覧の通り、娘の由は、生まれつきの奇形もむじながり、
血闇の氣もあるのです。

アキは打ち明け、首と回りながら曲を見た。

とした人間だ」

卑屈的な区切りは、そうは思わないと告げていた。

アサの目が据わる。

気にせず、宵は奥の押入れの襖を引き、座布団を一枚取り出した。そして由の敷布団の側に置いて「どうぞ、お座り下さい」とトキに

進めた。

トキが座布団に臀部をつくと、宵は置みの上で正座をし、改めて深々と頭を下げる後、面を上げた。

「鳶渡の事は予め調べさせて頂きました。その上で、お話を進めて参ります」

「そりや助かるね。不可思議な現象の説明つてのはいかんせん言葉足らずになつて面倒だからな」

トキは暗雲の空氣を払拭させるために軽く笑つた。宵も笑う。膜の張つた瞳を変えず、口元だけを笑わせる。それを一見し、ズクンとトキの心臓が痛みを訴えた。宵はトキの考えの中の後者。その者から伝えられる事案。自然と覚悟を決める。

「無代様のお手を煩わせることをお許しください。して頂きたい事はただ一つ」

トキは乾いた宵の表情を見つめ、少し遅れて反応する。

「……何かな」

宵は由を見る。何とも無機質に。

「私が今から由を殺めますので、ほんの2・3分前に鳶渡により渡つて頂き、私を止めて貰いたいのです」

スラスラと述べられた要求を、トキの耳は疑つた。そして徐々に現れる、心の中の黒い点。

「何だと…？」

憤怒の念が後から増長していく感覺に見舞われ、物腰が硬くなつていぐ。宵は変わらず、淡白な声のまま、平然な態度で口を開く。

「これは私の要求ではなく、由の希望なのです」

「…なに?」

「由はこのような身体なので自害が出来ません。ですから私が手を貸すのですが、そうすると私は犯罪者になってしまいます」

トキは由を見開いた。

「……お前、まさか」

鳶人だからこそこの気付き。宵の頬に微かな笑窪が浮かぶ。

「ええ、申したとおり、鳶渡については調べさせていただきました。黒穴…についても、私は持ち合わせております」

宵の要求は、鳶人にとっての禁じ手を意味していた。しかしトキはそのことには触れず、天井を漠然と眺める由を見た。

「…何故、手を貸す」

そして睨みの効いた眼を宵に当てる。

「母親なら、ぶん殴つてでもその考えは否定するべきだろ？」「真つ当な言葉に対しても、宵の表情はピクリとも動かなかつた。そのまま由に視点を動かし、口を動かす。

「由が私に初めて頼みごとをしてきたのです。それを無下にすることはしたくありません」

半ば諦めた物言い。そしてどこか嘲笑交じりの声。トキの奥歯が僅かに噛み締められる。

「死にたいことを受け入れるのが由を尊重することに繋げる考え方

」

説き伏せようと発したが、言い切る前に、ポツリと一つの蚊の鳴く様な声が、トキの耳を劈いた。

「しに……た……い」

「…………！」

バツと声がした方を向く。由が目に涙を募らせ、細く口を開いていた。その言葉は、善人を黙らせるに充分な力を持つていた。宵は眼球だけを動かし、由を見た後、トキに視線を送る。

「お分かり、頂けましたか」

トキの目が細まつていいく。そして胸中に考えを募らせる。

(由の本心で在るはずが無い)

その考えは、宵による心の操作を意味する。己から死にたいと要求を漏らすように、心が操られている。非情。あまりに非情なこと。

大方の見方であれば、これは催眠効果。自分は死するのが在り方だと、母親の手によって心が変えられている状態。断定は出来ないが、トキはその考へで推し進める。そうでなければ納得できなかつた。

「……分からんね。俺には由の言葉が布で覆われているように聞こえる」

「まるで、私が仕向けた。と言いたそうですね」

「……」

「仮にそのようであつたとして、由は何故、無代様に助けを求めるのでしようか。死にたくないればそれ相応の言葉を紡ぐはずです」宵の言葉は、トキの考への中では無意味に等しかつた。何故なら催眠効果で死にたくないという欲求を封殺されているからだ。しかし、この考へはトキの勝手な空論。もしもこの考へを押さえ込むなら、導き出されるのは『由が死を望んでいること』になる。その時、脳内に瞬きに近い一枚の絵が流れた。それは病院のベッドで笑みを浮かべる一人の女性の絵であつた。

トキは勝手に脳の引き出しを荒らす感情に、？別物だ？と怒声を上げる。

「…死にたいというのも、それ相応の要因…理由があるはずだ。それを確かめずせずして命を奪うなど、如何な状況だらうと呑む気になれん」

一線を引くときに対し、宵は口を僅かに閉じると、平たく開いた。「（）覧になつて、判らないのですか」

そう発せられ、トキの目が勝手に由へと向いていく。途中でそのことに気付くと、トキは宵を睨んだ。睨まれた者は静かに嘆息を漏らすと、視線をまじまじと交わした。

「無代様は、脳死状態の人間を、『ちゃんとした人間』だと言えますか」

唐突な重い質問。冷淡な声がおぞましさを増長させる。

「何？」

「意識も感情も欲求もなく、ただただ生命を維持しているだけ。そ

れは人間となり得るのでしょうか」

トキは自身の思いの言葉を発しようとした。が、その前に宵が続けて放つ。

「各学会では、脳死を人の死と判定する動きも活発化されているのですよ。人ではないという判定が下るのです。由も同じような状態なのです。動くこともままならなければ、言葉も上手く紡げない。意識も感情も伴っているのかさえ分からぬ。果たして、それは人間と言えるのでしょうか」

問い掛けに、トキは直ぐに回答する。

「人は人から産まれれば、人だ」

「有り触れた言葉ですね」

厭きた笑みが、宵に零れた。

「……」

宵は続けて、「慮外ながらも申し述べます」と前振りを置き、口を走らせた。

「昔、昔のことですが、これは現代でも強く想われていること。母親になろう者なら必ず想うこと。健康体の子どもが欲しい。古来では多出産や奇形児などは、『化け物』と称され、暗黙の下、殺処分されていたのです。何故なら、化け物を産んだ人間も、化け物扱いされるためです」

『化け物』　　その言葉が、トキの耳に入ると同時に、またしても脳内の引き出しが荒らされた。閃光のような速さで、映像が繰り広げられる。

内容は断片的なものだった。

道路の中央で突然と黒猫を抱える小さな女の姿。あちらこちらから血を流し、傷だらけで担架に担ぎこまれる小さな女の子の姿。白い空間の中に現れた、無精髭を生やした中年の男の姿。そして、醜いものを見る眼差しで、大口を上げて声を荒げる一人の女性の姿。それらの映像が、3秒ほどだけ流れると、トキは我に返った。

「……それと由と何か関連があるのか」

ワナワナと身を震わせ、恐々な剣幕のトキ。だが、それを尻目に、

宵は淡白に答える。

「言わせて頂いても、宜しいですか？」

一向に引く気配を見せない宵は、どこまでも本心を走らせる気があつた。傍らに、実の娘である、由がいるのを、全く気にせず確言する。

「唐櫃家は江戸末期（幕末）から代を重ねた由緒ある家系にあります。その中に、由は在ってはならないのです」

「由を汚名だと云いたいのか」

「……私がこの子を産み、思つたことは一つ。『失敗した』。それだけです。皮相で固めた笑みも浮かべず、それだけを浮かべました。そして一個の失敗が、我々唐櫃家の肩身を狭めたのです」

偏見や差別は、時を選ばず残忍である。

田舎町で頭一つ、二つも飛び出る資産家である唐櫃家。疎ましく思つ者は少なくなかつた。そして、その娘が障害者という、彼らにすれば吉報となり得る情報は町中に急速に跋扈した。そして、噂が噂を呼び、唐櫃家は生温い視線を浴びることになつた。副業として生計と成り得ていた農業も、『唐櫃の食い物を食べば奇形が産まれる』などと取り沙汰され、売れ行きは落ち込んだ。何の根拠も無い醜聞は、後から後から、それこそ時間が運んでくるように、衰えを知らずに増えていった。

「私は由に対して、常々『死ねばいいのに』と思つて参りました。そして、やつと由の口から、死にたいと零れたのです」

宵はそのはけ口として、由を選んだ。憎むべき対象として、世間ではなく、子である由を選んだ。

「子を愛する気が更々ないのか…ツ！」

トキは大喝する。だが、目の前の鉄面皮には何の効果も為さない。

恐ろしいまでに、表情は動かない。

「愛しますよ。走り回り、大声で笑い・泣き、我儘や蘊蓄を垂れてくれる、そんな普通の子どもでしたら、幾らでも愛しますよ」

そしてトキに一の句を告げさせず、断言する。

「ですが、由は違います。だから、捨て置いて宜しい？ もの？ のです」

ギリッとトキの口から音が鳴った。そして座つていられなくなり、威圧を含み、立ち上がった。

「お前、人を何だと思っている！」

宵はその行動にさえも何の反応を見せず、少し小首を上げて泰然な態度で言い放つた。

「人ではございません。私が言つているのは？ 物？ です」

「…………！」

そこで、空気が死んだ。

トキの悲痛が極まった。本当に、宵は由に、死んで欲しいのだと、否定していた心が、享受した。

立ち上がりついた身体は静かに落ちていく。顔を覆うように右手を広げ、苦悶に満ちた顔を隠した。心臓が針で突かれたか如く、チクチクと痛み出した。痛みの根源は、傍らで死を待つ由を想つ心。

母親からの罵詈雑言。由の表情は変わらない。何を思つているの分からぬ。だが、死にたいと言うのだから、その心中は辛いはずなのだ。絶望を煩つっているはずなのだ。

トキは涙を流しはしなかつたものの、奥歯は歯が欠けるのではないかと思えるほど噛み締められていた。哀しみ、同情という感情を超えた、悔しいという感情がのた打ち回っていた。そんな渦の中に、置を這うように進む由の姿が浮かび上がり、さらに激しさを増していく。

(この娘は、由は)

そしてトキは決意する。この手で、由をどうするかを、決意した。

顔を隠していた右手を眼前で握り締め、面を上げ、宵を見据えて要求する。

「由と、一人にさせてくれ

「……お話にならないと思しますよ」

「由の過去に渡る。今の状態では埒が明かない」

「どこへ渡らうと、意味のないことだと思いますが

「頭」なしに否定するな。やつてみんことには分からんだろう

どちらも我意を通す意気込みであつたが、宵が折れた。すべつと立ち上がり軽い余韻をする。

「お好きなように、なさつて下さい。……考え方改めていただけることを期待しております」

そう言い残すと、トキの脇を通り過ぎ、部屋から出て行く。襖の引き手に触れた時、ボソリと聞こえぬよう」「笛吹けども踊りずっとは、正にこの事ね」と倦厭した表情で呟いた。

トス

襖が閉まるのを確認したトキは、すぐに由の方を向いた。

「今から由の過去へ渡らせてもらう」

トキはそう言うと、鞄に手を伸ばした。そして中から飲料水の入ったペットボトルと、印籠のような形をした煤色の薬籠を取り出した。薬籠を開き、中から小さな錠剤を一つ摘み、天を仰ぐ由の視界の中へ入れる。

「コレは即効性があるが、効き目の軽い睡眠薬だ。悪いがコレを飲んでもらひ

了承はされることはなかつたが、トキはペットボトルのキャップを外し、薬を由の口元へと持つて行く。

すると、由の口が己から開いていった。無理矢理にでもこじ開けようと決めていたトキは、その反応に幾らかばかり驚き、静止した。

「……悪いな」

柔軟な笑みを浮かべ、薬を口の中に入れる。そして、すぐさま水を飲ませる。

「ちと温い（ぬるい）が、我慢してくれ」
トクトクと水は流れていき、由の喉が「ゴクリ」と音を鳴らした。投与が完了したトキは、道具を片し、由の眠りを待つた。その中で、せがむように呟く。

「由、お前はきっと、俺が思う通りの人間だよな」

由の瞼が弛緩し、ゆっくりと着実に閉じていった。伴って、意識が溶暗してゆく。

「……」

完全に眠りについた由の額に、トキの手が伸びていった。

探理

意識不明や睡眠により、記憶を呼び起すことの出来ない者に対してだけ用いることの出来る力。過去の記憶を鳶人が探し、鳶螺を通して力。

トキは目を閉じ、由の過去を覗き見る。とはいって、大量の情報が一気呵成に流れ込むため、人間の処理能力の限界が訪れるのは早い。特に遡る時間が長ければ長いほど、限界を迎えるやすい。

(もつと、もつと前)

トキの脳内に濁流の如く流れる情報は、およそ2年前の記憶。展開される映像はどれも似たり寄ったりで、同じ部屋の情景が大半を占める。見ているだけで精神が病んでしまいそうな悲惨ともいえる記憶の中から、目的に適した時間を選出しなければならない。艱難辛苦を味わうトキの額にジワリと汗が滲む。深く、深く。更に深く、記憶を遡る。

「…………！」

直後、トキの目が開いた。

「3年と42日前……此処にするか」

トキは探理に必死で気付いていなかった。背後にある襖が、薄つすらと開いていることに。宵の猜疑心に満ちた目が、中を覗き見ていることに、気づいていなかつた。

(……！)

宵の目が驚愕に開いた。トキの肉体が形を失つたように揺れた。目の前で起きる珍妙な出来事に、固唾を飲まされる。直後、粒子化したトキが由の頭の中へ侵入していく。

(……本物)

固まつていなかつた鳶渡への信憑性が凝固する。
(しかし、使い物にならない)

宵の眼球は下へ移動し、横たわる由を注視した。

* * * *

鳶螺の中、トキは迷っていた。繰り広げられ、高速で流れ過ぎてゆく由の記憶を見るか否か。母親である宵の突き放した態度。何の関心も感情もない目を当て続けられる毎日。その中にひつそりと窺がえる、由の死を欲する希求めいた言葉たち。

「……」

トキの由は自然に伏した。非道ともいえる記憶の絵を見るのが、辛かつた。

迷い込んでいる内に、光が差し込んだ。

トキは目を閉じた。

瞼の裏が照らされる。

トキが由を開くと、そこは見慣れた光景であつた。由の部屋。現実から探理から鳶螺の中で散々見た光景。籠の鳥とはこのことなのだろうと思わされる。

辺りを見渡そうとするトキの頭が静止した。中央に敷かれている布団に、由の姿がなかつた。

「……どこに」

呴いた次のこと。下を向くと、由が這つていた。あぢらこぢらこ蓬髪し、その必死さを物語つていた。トキはそれを見ても何ら驚かず、口の端を広げた。

「よつ」

軽快に声を掛けると、由は身体をビクリと動かし、一切の動きを止めた。そして問う。

「何処……から」

襖の開いた音さえなく、突如として現れた男に、由は困惑している様子だった。

「その話なら、もちつともともなところですみつ」

トキはそういって部屋の奥へと歩きていった。そして中央に敷かれてある由の布団の側で腰を下ろし、胡坐を搔いた。

「ほり、ここまで来てくれ」

トキはポンポンと敷布団を叩いて由を呼ぶ。

「……」

言われるがまま、由は右手一本で身体の方向を器用に変え、ズルリズルリと遅々とした速度で田標に真っ直ぐ向かっていく。それを眺めながら、トキは言つ。

「由、その動きは、母親の育から止めてくれと言われているよな」
由の動きがまたもや止まった。よく見れば、右手は震えていた。
懼れが生む震えに、苛まれていた。自身の名前はおろか、母親の名前まで知っている男。その者からの禁じの話題。懼れは告げ口というものから蔓延る。

トキはそんな恐怖に震えるいたいけな由を想う感情を抑え込み、真剣な声で、真っ直ぐ言つた。

「それでも、進みたいんだよな」

畳に伏していた由の顔が、上がつた。

「……う……ん」

そして小さく「ククリ」と頷く。右手は動き出し、トキの方へと身体を運ぶ。その中で、トキは告げる。

「信じられるんと思うが、俺は未来から来た者だ」

「み……らい?」

「ああ。お前を、助けたくてな」

由の中に、トキの言葉が落ちたとき、身体は無意識に止まつていった。既に敷布団との距離は、1mもなかつたが、疑問が満ち溢れ、それだけに集中してしまつっていた。

「未…来の私は……どう…なるの」

怯えた声。トキは唇を噛んで、告げるべきかどうか寸瞬だけ迷つたが、話すことにする。縫われたような口を、トキは開いた。

「…死を…望む」

トキと由は由を呑ませた。その表情は、互い互いに引けを取らず、痛痒に苛まれたものだつた。

「近い…うちに…そうなるつて…思つてた」

ボソリと、由は視線を離さず言つた。逆にトキが外したくなつた。見つめる表情が、今にも零れてしまいそうで、今にも爆発してしまいそうだった。それでも、涙という雲は、落ちることとはなかつた。全身を震わせ、耐え忍ぶ由に、トキはそつと手を伸ばし、頭を撫でた。

「由が、這つてでも進む理由、聽かさせてくれ」

由はそこで視線を切つた。そしてか細く答える。

「認めて…もらいたい…から」

重く、悲しい言葉が、小さく、しかしハッキリと木靈する。

「走り回れないけど…進めるつて…」

由はトキを見つめなおした。撫てる手が、動きを止めていた。

「私は…認めて…もらいたい」

とても些細なこと。

皆が当たり前のように思つこと。

そして、多くの者が、偽りながら『えられている』こと。自分を、認めて欲しい

勉学・運動・仕事・容姿・人間性・文章力・音感・会話能力・人間関係。挙げればキリのない程、人は認めて欲しいことが多い。由は、たつた一つ、認めて欲しかつた。それは儂くも、人間なら

誰しもが必ず持つてこむ」と。意識せずとも認められていくはずのもの。

私は、前に進める、人間だよ

這つてでも、どんなに怒られても、否定されても、前に、前へ、進んで行ける。強い子だよ

トキの頬に、一筋の涙が流れた。

トキが由を初めて見た時に抱いた印象。

【どんな逆境であろうと、前へ前へと邁進しようとする、強い心を持つた人】

重なったのだ。自分の思いの丈と、由の思いが。

「認めてもらえるさ。由は、こんなに頑張ってるんだからよ」

世辞でも、庇いでも、繕いでもなく、トキは本心からやつ断言した。

「認めて……もらえる……かな」

「ああ。きっとな。諦めず、頑張ってりや。きっとな。由のしたいことだつて、出来るわ」

「したいこと……お琴が……弾きたい」

「琴？」

「うん……時々、耳を澄ましたら、聞こえてくるの……綺麗なお琴の音色が」

見上げた表情は、とても朗らかだった。このような会話を奢めたことがなかつたような、どこか恥ずかしそうな表情であった。

トキは応えるように、同じ表情を浮かべる。

「出来るようになるわ。人間、やれば何だつて出来るんだからよ。足が動かなくても、片手が無くても、テニスやバスケを楽しむ、頼もしい連中もいるんだから」

由は嬉しそうに聞いていたが、少しずつ、もの悲しく由が伏せら

れていった。

「……でも、お琴は……無理。弾く手とか、弦を押さえる…手が、必要だから」

弱音をかき消すよつこ、髪を撫でていたトキの手は、軽くポンと叩いた。

「なら、誰かに頼んで弾いてもらえやいい。押さえてもらえやいい。恥ずかしいことじやない。人間、誰だつて人の手を借りてんだ。由も借りればいい。そしてその恩を、違う形で返せばいい。そうして成り立つてるのが、この世界なんだからよ」

「どう…返せば……いいのかな」

「それは俺が考えることじやない。由が必死こいて考えるもんだ。大丈夫。生きてりや必ず、答えは導き出せる」

「ううだと……いいな」

由が初めて笑ってみせた。トキの衷心に安堵の息が落ちる。

…

その時、ポツリと音がした。戸襖の外からだ。トキの耳は過敏に拾い上げた。ゆっくりと横を向き、眉を尖らせる。

(…見にいくか)

強面の顔となつたトキを、由は不思議そうに眺めていた。

「どう……したの？」

「……すまんが、ちと行かなきやならんよつになつた。また、現行世界で会おう」

「お兄さんと…また…会えるんだ」

トキは口の線を広げ、「必ずな」と確言した。

そして立ち上がり、由の部屋から静かに出て行つた。

由はもそりと身体を布団につけると、自身の頭を撫でた。とても温かな温度が残っていた。

トス

戸櫻を閉めて廊下に出たトキは、一つの違和感を抱いた。

「何か……違う？」

しかし、出處が不明。単純な勘違いか、または錯覚なのか。それとも、感覚的に拾い上げただけで、意識として十分な材料が回収されていないのか。そのことは分からなかつた。

やきもきした胸中のまま、トキは音のする方へ忍び足で向かつていく。

ふと目に入った窓の外は、庭のようであつた。それもかなり広大。造りは日本庭園を意識した美しいものであつた。しかし、影が多く降り注いでいた。丁度この屋敷の裏手に位置する野山と隣接しているためか、林が光を遮つていてるのだ。トキは中々、味があつていいな。という感想を抱く。

そうして辿り着いた音のする部屋は、由の場所からそつ離れた位置ではなかつた。

「…………」

間接的な音の正体は話し声。トキは襖を少しだけ引く。田についたのは日本刀が鎮座されていること。ああ、ここか。と認識し、廊下を見渡し、誰か来ないかを警戒しつつ、耳を澄ます。

「……つまり、その鳶渡という力を持つてして、時間を遡り、改変が出来るというわけね」

淡白な声。言うまでもなく宵の声だった。そしてその話し相手は。

「はい。それと、鳶渡を使える者を一人、探し当てました」

あまり特徴のある声とは言えないが、嗄れ声に入る太い声は、年を召した男のものだということが分かる。男の声の者は言い終える

と、カサリと紙のような音を鳴らした。

トキは小首を上げて音から、（資料か…）と連想する。

「鉢代 ノギクという女性です」

そう放たれた名前に、トキは頬を搔く反応を示した。

（初っ端にノギクか……ま、あいつは腕がいいからな）

「こい、重要だわ。3歳になる娘がいるじゃない。これでは、納得してもらえると思えないわ」

意味は、娘を殺すことを鳶人が同意することの可能性。

トキは誰にも聞こえぬように舌打つた。

（舐められたもんだ。例え、加室の旦那だろうと、信濃だろうと、ゲンや沁玖に頼もうと、頭を縦に振るやつなんざ居ねーよ）

そして、こんな早い段階から由を殺害する画策を起きていたことに、苛立ちを募らせる。

その瞬間。ゾクリと背筋に悪寒が走った。気のせいではなく、ビリビリと感じる負の悪寒。トキは何事かと辺りを見渡す。その時、窓の外を通過した目が、異常を捉える。木々の集まりから、影が多く出来ている庭。その影とは別個の、あまりにじず黒い影が、？居た？。そしてその影から、漆黒の氣炎が立ち昇っていた。

「……！？」

脳が認識、後、すぐにこの現象に見合った結論が導き出される。

影の形は円。黒穴。

黒穴は不合理を喰らうモノ。

鳶人が過去世界に居る状態は、過去の改変が完了していない状態である。由にはまだ改変の情報が行き渡っておらず、この現象の候補からは削除される。つまり、進行形で黒穴が感應しているというこの状況は、トキが不合理の対象と、【成り始めている】ということが。

即ち、由の鳶螺を渡ってきた者にだけ架せられること。
死した者には鳶螺が無い。それを渡ること。答えとして、不合理。黒穴が気炎を迸っていること。

答えとして、現行世界での由が、死の際に迫いやられていることを指す。

「あの……野郎！ 馬鹿なことを……ツー

トキは小声ながらも怒声を上げ、すぐさま帰化を始めた。急がなければ、由が危うい。

ふと、宵の耳に、聞きなれぬ声が入った。

「……？」

宵は裸に視線を送る。

「どうかされましたか？」

年老いた男はその行動に疑問を抱く。宵は「いえ……氣のせいから」と呟く。が、視線は動かなかつた。数十秒の迷いを経て、立ち上がり、裸を引く。

廊下には誰もいない。

(やはり……氣のせい？)

「宵様……？ 誰かいいるのですか？」

「いえ。誰もいないわ……少し、由の様子を見てくるわ」

宵は男の返事を待たず、歩いていった。

ス

由の部屋の戸襖を引き、眼球だけを動かし、辺りを見回す。が、その中には由が一人、寝静まつているだけであつた。

「……」

何も無い。という安堵を交えた次に、鼻孔が匂いを嗅ぎ付けた。(土の匂いと、煙草の匂い？)

微かに香る、この部屋では嗅げない匂い。

「……誰か、居るの？」

そう問い合わせるが、この新地の部屋では隠れる場所などない。あ

るといえば押入れぐらいだが、座布団や布団に圧迫されている中に入っても、息の根を上げるのはそう遅くない事。

トキの違和感。それは、檜独特の香りが、薄らいでいたこと。

木の特性として、強い匂いを放つ期間は約1年ほどである。湿気や光、埃などの要因により、木の匂いは膜を張った様に閉じ込められる。現行世界での？最近？に、由の部屋の建具を作り替えたとしたら、3年前の過去世界での建具は、木の匂いが封じられた状態になる。その中を、トキの放つ煙草の匂い、そして唐櫃家までの道中に土埃を掛けられた服の匂いが相俟つて、この空間にあつてはならぬ匂いを残してしまつた。宵に疑心を生ませてしまった。

（庭師が入つた…？ いえ、あの男は煙草は吸わない。ただ草木のにおいを煙草と勘違いしただけなのかしら…それとも…）

宵はトキをまだ知らぬ状態。勝手な疑いを掛けられる者は、唐櫃家を疎ましく思う連中。

（由を見るために、誰かが侵入してきた…？）
考えに達すると、不満がポツリと顔を出した。

（それほどまでに、私たち（唐櫃家）を鬱憤の出汁にしたいのね）
宵は後ろ髪を指に絡ませ、グッと拳を握つた。その時の眼は、光の閉じた、暗鬱の眼であつた。得手勝手に、その瞳は由を捉える。全てを、由のせいに、するために。

「そう、全てあなたが居なければ……ツー」

檜の匂いが漂う中に、火の点つた声と、喉が痛えたような苦しそうな声が、響いていた。

敷布団の上には、覆いかぶさるよつこいつの人間のシルエットあつた。

上に乗る一つ下に面する一つに両手を伸ばし、力を込めていた。下に居るひとつは、抵抗をしようとも、片手が伸びるだけで、ほとんど無抵抗であった。

宵は、その両の手で、由の首を絞めていた。

分かりにくい女性の喉仏の感触が、直に手のひらに伝わっていた。喉に鈍痛を与えられ、空気を失う苦しみを与えていた由は、睡眠薬の効果のせいで、一種の麻痺状態。身体に力が入らず、嘔吐を催す刺激に耐えるだけであつた。見開いている由の眼球が、ドンドンと上に行く。

ギュウッ…ギュギュギュギュギュ

まるで首を千切らんとせんばかりに力を込める宵に、一切の容赦はない。

「かつ……ぎつあ」

由の伸びていた右手も力を失い、パタリと布団に落ちていく。あと、一息。

娘の死を求む熱情の中、ふつと影が降りた。

パン！

宵の片頬に、強烈な一撃が入った。

衝撃により、身体は横に倒れ、由の首から死神の両手は離れていつた。

「この平手打ちの意味、分かるよな」

頬の痛みを手で押さえ、ピリピリとする感覚を実感している者は、

眉を尖らせた。怒りの矛先は、由の前の男、トキ。

トキの形相は、一言で表すなら憤激。その様相は、宵の怒りとは比べ物にならぬ、まさに烈火の如く。

「分かりたく、ありません」

宵は、己の犯している醜行を認めようとしない。トキは、宵の前に貫禄を背景にドスンと座り込んだ。

「由はもう、死にたいなどとは吐かない」

核心を持つて放たれた言葉の意を、宵はまず否定した。

「え？」

「由は、お前に認めてもらいつたために、生きる」

トキの発言とほぼ同時期に、ズ　　と、氣味の悪い感覚が、空間を支配した。

トキはその変化を肌で感じ、感じられない宵はトキの発言に、信じられない顔をする。

過去が現在に波及する、鷺渡の時が、近づいている。川を流れる水の如く、その流れは発生地点から地球を覆うように一気に広がる。

今からの世界は、由が死にたいと思つ世界ではなく、由が生きたいと思つ世界。

空気を入れ替えたかのように空気が轟き、鷺渡の力が、波及する。

過ぎ去った波の後、トキは静かに口を開いた。

「由は、お前に認めてもらうために、生きる」

宵は頬の痛みを理解するのに、困惑している様子だった。しかし、直ぐに感じ取った。己の行動を止めるために、この男が平手打ちをしたのだと。

「由と、話したのですか？」

宵は鋭い目つきで問い掛けた。トキは片頬を持ち上げて答える。

「ああ。色々とな」

「私とは話をしない由が、何故、貴方に話をするのですか」

「お前が、由を理解しようとしているからだ」

「理解するも何も、この子は何もしていないじゃないですか」

嘲笑交じりに宵は訴える。トキは由に視点を当て、穩当な笑みを浮かべた。

「もつとよく見るんだ。由は、這いつてでも前へ進もうとしていただろ？」「

「此処から、逃げたいだけじゃないんですか」

納得のいかぬ固定概念から離れない宵に、トキは一瞬だけ残念そうな顔をすると、諭すように言つた。

「：本人に、聞いてみろ」

宵は由をまじまじと見た。

由は、母親である宵と話をしなかつた。すればするほど、虚しくなるからだ。聞き入れてもらえない、無視をされる、それ以前に、口を開くたびに、侮蔑の眼を向けられるのだ。誰もそんな相手に好き好んで話をしたりはしない。

本当は話をしたい相手。笑い合いたい相手。けれど、片一方がそ

れを放棄している時点で、成り立たない。それが関係性といつもの。終始無言を貫いているような我が子に、宵は初めて尋ねる。

「…本当なの…？」由

由の頬に、涙が流れた。天を仰いでいた顔は、横を向き、涙の詰まつた声が、宵の耳に触れる。

「…認めて、もらい…たい」

「…！」

「お母さん…と…一緒に…お夢…したい…」

「…え？」

宵は目を見開いた。

単純な願い。子どもなら誰しもが持つであろう、単純な願い。誰かと何かを共にしたい。その願いは、気持ち一つで、叶えられるはずだった。

「何を…言つてるの？」

口はおぼついていた。搔き立てられる、衝動があった。由の願いを原動力として、宵の記憶の詰まつた鍵つきの引き出しを、感情が強引にこじ開けた。

映るのは、今の自分とは似ても似つかわしい、光陽に照らされた女性と、一人の男の姿であった。

女性の腹中にまだ、赤子が居た時のこと。

ポン…ポン

「どんな子が産まれてくるのかしら」「

「きっと、宵に似た、美しい女の子だよ」

「まあ。もしかしたら、孝治さんに似た、格好いい男の子かもしけないわよ」

「ははは。宵は産まれて来るなら、どっちがいいんだ？」

「そうねえ、どちらかと言えば、…女の子かな。着物の着付けやお琴とか。一緒になつてしまいわ。そう言つ…孝治さんは？」

「うーん。俺はどうちでもいいかな。元気で力強い子なら、文句な

い

「そうね。それが一番だわ」

優しい笑みに包まれた、温かい空間。

そして、

「おぎやあ！ おぎやあ！」

分娩室に木靈する泣き声。生れる者が鳴らす、慟哭に似た咆哮。早く早くとその赤子を求める、分娩台から手を伸ばす、脂汗を滲ませる女性。

生まれた我が子を優しく抱えた、直後。

瞳の奥の光が急速に沈み消えゆく姿。

夢は沢山あつた。山積しそぎて、どれからしようか迷うほど。それが一瞬で打ち碎かれた。泣き叫ぶ、愛しいはずの姿が、憎く思えた。

何故、産まってきたの？

何故、こんな姿なの？

何故、私たちの愛の形が、こんなにも、不完全なの？

痛痒な想いは、ただ外見だけで判断した、一方的なもの。愚行とも言える行為。本質的には、互いが求めた通り、女の子で、お琴に興味を持つていて、力強く生きようと/orする、人間だったのだ。

そう見よとしなかつたのは、そう見えなかつたのは、宵や孝治や家憲。それと周りのせい。

優しさが与えられなかつた由の小柄な身は、本来持つていた輝きをくすませていった。皆のせいを由のせいにし、汚いと罵る愚か者共ばかりが、尋めいていたのだ。

「由の気持ちを本当に分かつてやれるのは、俺じゃない。母親であ

る、宵。お前なんだ」「

群集心理が渦巻く中、真っ直ぐと由を見つめ、搔き分けて進んだのが、トキだった。初対面だからこそ、真っ当に、真摯にその人物を見ることが適う眼である。

そして、トキと言う理解者とも云える者は、由が待ち焦がれた、鉄の仮面を割る弾丸の装填された銃の【引き金】だった。

ポツリ、ポツリ。鉄の面から流れる涙は、面にヒビを入れ崩れ落ち、内を掻きたて歯や頬を揺らした。宵の涙は、ポタリポタリと置みに零れた。

同じ想いを抱いた娘に、この仕打ち

私は間違っていた？

相容れぬ存在と、人の目ばかりを気にして刷り込んで

私は、間違っていた？

人目の付かない場所でさえ、頑なまでに憎み散らして

私は……間違っていた……？

最期はこの手で

私は……

強い悔恨の情が、身を焼くように襲った。揺れた世界の目の前に、一つしかない片手が伸びてきて、涙を掬つた。

「お母……さん」

頬に触れている手のひらを、宵は両手で覆い隠した。

「変われる……かしら……やり直せる……かしら」

ギュッと瞑つた目から、大粒の涙が流れ落ちた。渴いた愛情から滲み出るよつに、滂沱の雨が、降り注いだ。その雪は、由の涙と接觸し、弾けて混ざつた。

トキは下唇を噛み締めて、由の頭を一撫すると、何かに堪えつ立つ立ち上がつた。

「取るに足りない些細な気遣いで、何でもかんでも変わるものや」
朗らかな笑みの中、その詞を落として、トキは由の部屋から出て行く。途中で由が涙声で「お兄さん」と呼び止めたが、背中越しに手をひらつかせ、そのまま唐櫃家から出て行った。

聳える大門を前に、「ここも開けりやいいのにな」と呟いて、小門をくぐった。

開かぬ扉はいくつもある。

些細な他の力により、それは糸も容易く開くのだが、それを知る者はあまりに少ない。

この歴史深い家憲を重んじる唐櫃家は、言つなれば不幸であった。教えてくれる者が、今の今まで現れなかつたのだから。更に、開けようとする者でなく、頑なに閉じようとすると者たちしか、居なかつたのだ。

そんな不幸を一身に当てられ続けた由は、単なる被害者。化け物でも何者でもなく、単なる被害者なのだ。

トキは砂利道を歩きながら、煙草の煙を空に向かつて吹きかけた。

「頑張つたな。由

煙はすぐに空氣と同化し、消えていった。

数日後

トキは自室のテレビの前で、固まっていた。

報道されている内容に、絶句した。世界が揺らいだ。今が現実なのか、夢の中なのか、判らなくなつていた。いや、この心臓や腸を灼かれる感覚は、現実のもの。理解はしているが、単純に逃避したかったのだ。目の前で、耳に入つてくる、情報に。

「今日未明、市町にある唐櫃邸から一人の遺体が発見されました。親族の確認の下、唐櫃 実さん（33）と唐櫃 由ちゃん（11）のものと判明しました。実さんの死因は首を吊った窒息死で、状況からみて自殺したものとみて調査されています。由ちゃんは胸に日本刀が刺され、出血多量が主な原因とみられます。警察の見方では無理心中を図つたものとみて、調査する方針のようです」

淡々と読まれる報道。

トキの脳裏に過ぎる言葉。

やり直せるかしづ

「そうじゃ……ねえだろ……ッ」

砂を噉むような想いを募らせ、頭は伏すように落ちていった。そして暫くの間、上がることはなかつた。

チヨンチヨンチヨン

雀が囀る中、小うるさい音が、古ぼけながらも新築のよつたなアパートから木靈していた。

「ンンン」と鳴るばずの玄関扉は、その日は不機嫌なのか、ドンドンツー！と不躾な音であつた。

「三才圖會」卷之三

早朝の時間帯を一見し、瞼を閉じる。が、そんな夢の中へなど誘わせんとばかりに、鍵の掛かっているはずの扉が勝手に開いた。そしてピッキングの達人が侵入した。

11

「早く起ねなさい」

文句をいう前に放つたのは、このアパート全室の鍵を持つ者アパートの大家、もとい美登里、もとい。

鳥子 唐突すぎて頭が回るん

てこるよつた日を無理やり聞く。

そうして捉えた美登里の姿。服装は、白い半袖のTシャツに、太股を隠す長さの黒の綿パンに、白のスニーカー。それと手には軍手。という、爽やかな言い方であればスポーティーな格好。地味な言い方であれば芋掘りにでもいくのかと思える格好であった。

1
...
?

ますます理解の範疇外に追いやりられるトキの思考。土足で畳の上

「……何をしようって腹だ？」

「あん？ その言い方だと、私が悪いことしようとしてるみたいじゃん」

美登里は不機嫌ときよとんとした顔を同時に見つめ。既に不法侵入しているのだが、そういう意識はないようだ。

トキは布団から身を離し、胡座を搔いた。

「こんな朝つぱから何の用だ」

ボリボリと頭を搔いて問う。美登里はふふん。と不敵に鼻を鳴らす。

「善行をしにここうじやない」

「意味が分からん」

「ボランティアよ、ボランティア。今日はこの地域で清掃活動があるのよ」

勤しもうといふ意気込みは格好から感じ取れる。

トキは田を細めた。猜疑心の田だ。

「鳥子つてそんなキャラなのか…？」

「産まれた時から善人よ？」

美登里は二ヶ『リ』した笑みを見せた。

「はつ…」

トキは鼻であしらつた。 そつすると左腕の一の腕に『善人キック』と称された容赦の欠片も見当たらぬ蹴りが入れられ、布団に沈むことになった。

痛みに打ち拉がれているトキを、美登里は起こさうとする。

「わーわー、早く着替えて、『ミ袋持つて、必要なら軍手も上げる』言いつつ手を取りうと一步近づく。すると突然、右足がガクンと下がつた。

「きやつ…」

美登里はバランスを崩し、そのままうつ伏せで倒れる。当然、正面に倒たトキは下敷きとなり、布団の上に仰向けて倒れた。平面であるはずの畳の一部が凹んでいた。美登里は運悪くそこに足を嵌めてしまったのだ。

両名は偶発的な密着を強いられた。

「……」

トキは上に乗る美登里に対し、軽いなあという印象を抱いただけ。

美登里はといつと、心臓の鼓動が跳ね上がり、バクンバクンと音を鳴らしていた。身体の熱が全て頭部にこみ上げたのか、顔は耳まで真っ赤になっていた。

「~~~~~ッ！？」

ふるふると瞳や指先が震え、頭が白紙となり、トキの胸板に顔を伏すことしか出来なくなっていた。

「…………なあ」

と、時間にして約5秒経つてからトキが言った。

「ひ、やー！　は……はい」

美登里は上擦った嬌声を出し、赤みがかつた顔をトキに向かえた。トキは艶めしくなつていてる美登里を見ると、無意識に喉が鳴った。美登里の容姿は可憐。それが鼻先10cm未満。男の中の雄が耐えるには厳しい状況。

潤んだ瞳。長く伸びた睫毛。憂いを含んだ唇。何より赤みを帶びた頬が、トキの思考を惑わし、抑制、タガを外そうとする。

「…………」

お互いの温度を感じる中、トキの左手が美登里を抱きしめようと伸びた。が、寸でのといひでトキは拳を握り締め、「」の意識を取り戻す。

「鳥子、重い」

トキはせせら笑つた顔を浮かべてみせた。

「なつ……」

ムードがぶち壊れたのを機に、美登里も我を戻し、すぐさまトキから離れた。

「わ、わわ、悪かつたわね！」

それでも動搖は拭えず、隠すために美登里は振り向き、玄関へ駆けていった。

「す、すぐに出発するから、は、早くね！」

バンッと扉が閉まった。トキは深くため息をして片手を見つめる。「…危うく犯罪者だつた」

そう咳くと、目が伏せられた。妙な胸の靄があつた。おどろおどろしいそれは、人の温もりを求めていたのかもしれない。トキはふいに窓から空を眺めた。間を置き、眉が顰まる。トキは肩で息をついて、服を着替え始めた。

ガチャリとトキは自室の鍵を閉めて、美登理と対面した。すると、一言。

「何であんた、いつも通りの格好なのよ」「ん？ 着慣れてるから…だな」「汚れても知らないわよ？」
「まあ、また買えばいいさ」「男の人ってそういうとこ、無頓着よねー」「心が大らかなんだよ」
トキは丸めた手で胸をポンポンと叩いた。
「あーすごいすごい」
美登理は呆れた顔をして先へ進んでいった。

徒歩15分ほどの時間を掛け、トキたちは公園に到着した。

公園は扇形をしており、広さはかなりのものであった。遊具が充実していて、ベンチも幾つも並んでいる。朝の光が街路樹の葉を照らし、白く綺麗な雰囲気を作り出していた。

早朝であるにも関わらず、ガヤガヤと賑わいを見せる公園内は、周りを見渡さずとも多くの人が目に付くほどに居た。この集団の特徴として、皆、歳を召していくて、背や腰が低い。そして、それぞれ「ミニ袋や軍手、タオル、火バサミなどを装備していた。

トキは啞然としていた。

「結構、本格的にやる気だな……」

「ういった活動に参加したことが無いためか、想像よりも規模が大きかつたようだ。」

チラチラと視線を泳がせるが、美登理以外に若者は見当たらない。「鳥子だけか、若いのって」

トキの横に居る美登理は、口をへの字に曲げた。

「この年齢層ならあんたも若いでしょ」

美登理は小声で「あんたの歳、知らないけど」と付け加えたが、トキは聞いておらず、「んー、まあそうかもな。俺より歳低そつなのが見当たらねーしな」とキヨロキヨロとしながら言つた。

美登理は不機嫌に喉で小さく唸つた。

その時、一人の老人が手を上げ、声を出した。

「皆様、お集まり下さい」

「ひそつて皆が振り向く。そして、鶴の一聲の如く、老人の前に集つてゆく。

トキはそんな周りの反応に、「なんだ？あのじいさん」と美登理に率直な疑問を投げかけた。

「このボランティアの主導者よ。と言つてもみんな一般の人だから、ただの進行役だけだね」

「ほー。まあ確かにたかがゴミ拾いに主導者なんていらないもんな」「たかが……ね。そういうのに限つてポイ捨てするのよねー？」

美登理は胡乱な目つきでトキを見据える。すると、目を合わせようとせず、無言で老人の方へと歩いていった。その背に追撃する。

「まさか、煙草吸うくせに携帯灰皿持つてないの？」

トキはその言葉にピタリと止まり、口を尖らせた。

「イヤ、モッテ…マスヨ？」

「なんで片言なのよ」

目が泳いでいた。

美登理は分かりやすつと心中で落とした。

トキは後頭部を片手で弄り、「イヤー、ハツハ。今はもつてきてないからなー」と恍けた面構えをした。

「苦しい言い訳ねー」

見透かされたような物言いに、トキは「ぐつ…」とまずい顔で片奥歯を噛んだ。

そんなやり取りをしつつ、老人の話に耳を傾ける。

「えー…それでは今から町の清掃活動を始めます。なるべく一人以上組となつて、分別の方、宜しくお願ひします」

腰を折った老人に対して、トキは顎に親指を当てて感心していた。「なるほどなー。二人のゴミ袋を可燃と不燃で分けて集めりや効率がいいもんな

「人数が多いと資源ゴミ担当も加えられるから、人が多いのに越したことはないのよ」

得意げに語る美登理に、トキは不穏な考えを募らせた。

「ん…時に鳥子よ。もしかしてだが、俺を誘つたのつて…孤立するからか?」

二人以上の組。もしも単身で行つた場合、必然的に余り者同士、他人同士の組み合わせとなる。トキは美登理がそれを避けるために自分を叩き起こし、いや、蹴り起こしたのかと疑つた。

「…ほら、あんたこの前、どつか行こうつて言つてたじやない。

そのどつかに連れてつてあげたのよ」

美登理の言い分にトキは苦笑した。

「苦しい言い訳だなー」

ムツとした美登理はツンツと顔を逸らし、「そう思いたければ思つてればいいわ。後で改めることになるから」と息巻いた。

「どういう意味だよ?」

眉を曲げるトキに対して美登理は「さーさー、無駄話は置いといて、善行開始」と完璧なまでに無視して、ゴミ袋を広げた。

* * *

トキたちが清掃を始めた同刻、シズクは美登理のアパートの前にいた。服装や髪型など、以前とそのままで、やはり輝きは浮いている。

足は淀みなく105号室へと進んでいき、腕は躊躇なく玄関扉に振るわれる。

コンコン

コンコンコン

借主からの返事を待たずしてドアノブに手を掛け、扉を開ける。が……

「あら……？」

玄関扉は枠から離れるのを拒んだ。ガチャガチャとドアノブを捻り、念には念の確認をする。

しかし、開かない。

「……まだ寝ているのかしら」

シズクは携帯を取り出し、時刻を確認する。7時半を回ったところだ。この時間ならまだ睡眠を堪能していても不思議ではない。なので、ノックを連打し、呼びかける。

「トキ。私よ」

しかし、一枚越しには何の音もすることはなかつた。無言を突き通す105号室に、シズクはため息をする。

(出掛けているのかしら……)

納得いかぬまま、アパートに背を向けて歩き始める。

「折角、トキとフレッシュな朝食を探つうと思つていたのに……。何処に行つたのかしら」

アパートの敷地から出る間際に、己の言葉を機に、ある考へが過ぎる。

それを下に、頭と身体と疑念が、大家の部屋へと吸い寄せられた。
「まさか……ね」
シズクは「一応、一応」とぶつぶつ呟きながら、美登理の部屋の玄関扉を叩いた。

「なあ、鳥子よ。」これは……どうちなんだ?」

トキは両膝を折ったしやがんだ体勢で、地面に落ちている物を指差した。美登理は「何が?」と覗き込む。そこには半分の消しゴムが落ちていた。

「燃やしていいのか? 燃やしちゃダメなのか?」

質問に、回答者はため息を漏らした。

「ホント、地域のこと何も知らないのねー。」この自治体のパンフレットに書いてたわよ。ゴムや革は高温で燃やせばダイオキシンの発生がほとんどないから、燃やせるゴミに分別してくれって」

事前の調べを終えている美登理の鼻は高かつた。

「博識だな」

トキはあまり気に留めず、それだけを言つと消しゴムを拾い上げ、美登理のゴミ袋に放り投げた。

力サリと音が鳴ると同時に、ピリリリリリといつ高音の電子音が鳴つた。

「お。やつと来たかな」

美登理はそう呟くとポケットの中から携帯を取り出した。

「友達でも来るのか?」

トキは訊きながら立ち上がった。

「まー、今はそんな感じの人」

曖昧な答えをした美登理に、トキは小首を傾げた。

美登理の通話中を気遣い、トキは黙つたまま辺りを見渡してゴミを探す。当然、視線は地面に向かっていた。前を粗方見終えて、後ろを向く。すると、視線の中には人の足が見えた。白のスニーカーを履いていて、鳥子か?と過ぎるが、綿の黒ズボンは長く、候補から除外された。徐々に視点を上げていき、その全貌を捉えたトキは、

呆然とした。

「……！」

携帯を耳に押し当て、立っている人物。

不釣合いな白のTシャツに、程よく茶の交じった髪。剛健な気風からの顔立ちから、垢を少し抜いた、朗らかな印象の男。

「み、富路さん…？」

トキが動搖を隠せないまま呟くと、富路 博信はギョコチないながらも笑って見せた。そして深く、礼儀の良い一礼をする。

「ありがとう」

そうして放たれた慇懃の言葉。トキは面食らった顔をするが、直ぐに後頭部を搔く仕草をした。

「…堅くモノをつぶらん欲しいですが、受け取つておきます」

少々の距離を置いて、気恥ずかしそうにする二人を前に、美登理は柔軟に口の端を広げた。

富路は公園の外に居る活動の方々に挨拶をしにいった。その姿を見つづ、トキは美登理に言つ。

「しかし、親父さんがこんな活動に参加するとはなあ…」

「ダメモトで誘つてみたら、仕事ほつぱいででも行くつて言ってくれてね」

嬉しそうにする美登理。トキの顔は綻んだ。

家族の時間は放つて仕事に注ぎ込んだ結果だとは

脳裏に浮かぶ後悔の言葉。

それを何としても覆そつといふ富路の心意氣。

「へえ」

トキはそれだけを言い、後で「できるじやないか」と、誰にも聞

「えぬよつ眩いた。

ダラリと落ちていいの両手と頭、歩く歩幅は半歩半歩と赤子のよつ。絶望とは言えないまでも、愕然とした姿は今にも躊躇そんしゃし、亀になつてしまいそうであった。

当てもなく彷徨いつづける者は、美登里の玄関を叩いたことで、即妙な考え方を打ち出し、悲觀に暮れたシズクであった。

「間違いない……トキはあの娘どこか遠くへランデブーしているのだわ……」

休日ということを考慮し、比較的朝の早い時間帯からトキと美登里の行方が分からぬ状況。導き出されるのは一人でどこかに出掛けていること。そして美登里もトキも金を持つていて。

ならば、ケチなことを言わず、遠出をしている公算大。

つまり、愛の旅行劇場が繰り広げられている公算大。

裏を返さずとも、イチャイチャとしている公算大。

シズクは立ち止まり、「ふ……ふふ、ふ」と不気味に笑う。何やら沸々と紫紺色をした氣炎が立ち上っていた。

ゾクリと、美登里の背中に悪寒が走った。何事かと辺りを見渡す。しかし変わったことは何もない。と、その時、途轍もなく美しい女性を見つける。

(うわー…すゞく綺麗な〇〇さん)

素直な感想を抱いている中、トキは美登里が固まっているのに気づき、何だと視線を送る。

「ん……シズクじやねえか」

遠目からの的確に人物を割り出したトキは、改めて見据え、「何だか只ならぬ気配を出してるな」と呴いた。

「知り合いなの？ あんな別嬪さんと」

「別嬪さんつて……お前、オヤジみたいだな」

「あんたに言われたかないわよ」

トキは「なはは……」と乾いて笑った後、シズクに近付いていった。

嫉妬心から心が荒れているシズクの状態は悪の塊であった。

（どうしてやろうかしら。あの小娘。助けてもらつた上に近くまで来るつてことだから、多分にトキの事を気に掛けているのは感じていたけれど、まさかこんな早くに手を打つてくるとは想定外だつたわ。ていうかトキもトキだわ。一回りも歳の離れた子に気を許してホイホイと着いていくなんて。いや、待ちなさい。勝手に決めつけているけれど、美登里さんから誘つたのではなく、トキからだとしたら……くつ、あの口リコノー。そんなに若い娘がいいのね！一緒に居た時間とか関係なく、ただ若いというステータスに魅了されるのね！）

忌々しい！とシズクは拳を握り締めた。

「……おい、 ク」

悪魔染みた空間が出来つつある頃、聞き慣れた声が侵入してきた。まるで水盤に大きな雲が落ちたよつて、音は波紋の如くジワリジワリと広がつた。

「……おい、 シズク」

「うえつへい！」

シズクは吃驚し、奇声を発すると「ヒ、トキ！？」と正氣に返つた。

「な、なんつー声出してんだよ」

あまりにも大きなリアクションに、トキもビクリと背を逸らし、「らしくねーな」と言わざるを得なかつた。

シズクは直ぐに顔面筋を固め、ピッと背筋を伸ばし、普段通りを作った。

「ぐ、偶然ね。てっきり何処か遠くへ行つてゐるのかと思つていていたわ」

「ん？ 遠出するようなこと、言つてたつけか？」

「いえ、美登理さんも居なくなつていたから、一人で何処かへと…」

シズクはそう言つと空咳を2度した。

トキは弧を描いた眉宇を作り、「鳥子なら居るだ？？」と後ろに居る美登理を親指で指した。シズクは目を細めた。

「アレが… 美登理さんなの？」

シズクは指された人物を把握するに至ることが出来なかつた。何故なら、シズクが知つてゐる美登理は、生命維持装置で命を辛々に繋げている、髪の毛もなく、目も開いていない、今とは全く違う様相の頃のものだからである。

「顔、知らなかつたのか」

「女子高校生という事くらいだけ…、何だか芋っぽい娘ね。…と
ころで、何をしているのかしら」

「ん。清掃活動をやらされてな」

ガサリと手に持つゴミ袋を持ち上げる。それを見て、シズクは愁眉を開いた。最悪の想定が払拭されたのだ。

「そう…なの」

ただの勘違い。考えを急いた憶断。少し頭を冷やせば辿り着ける範疇のこと。この失態は、まるで【判断力】という色の付いた水を濁みの中へ口から流してしまつたよう。僻意に及んでしまう自分にシズクは駄目ね。と咎め、律する。

悟りを開こうとする最中に、足音がした。ふいにそちらを見てみると、そこに居たのは宮路 博信であった。

ピシッとシズクが石化した。

白さを取り戻していた内なる内の色合いが、黒い斑点に高速で侵食されていく。尻目に、トキと宮路が親しげに話を始めた。要因は

準備運動を完了させ、迷路を打ち立てる。

(む、おおおお親公認ですって————ツー？)

あまりの衝撃に顔がムンクの叫びのように縦に伸びた。
その後、シズクが己に叱咤を入れたのは、5分ほどの奔走を経て
からであった。

誤解を何とか振り落とし、冷静になつたシズクは富路と談笑を始めた。

その様子を窺いながらも、膝を折つてゴミを拾う善行者たち。中でも美登理はジツとシズクのことを眺めていた。そして横に居るトキに問う。

「ねえ。あのシズクさんって人、鳶人だよね？」

「ん……氣付いたか」

「だつて、お父さんがあの事で覚えてるつて、あんたと同じじゃない」

「まあな。だが、シズクは……正確に言つなりや鳶人ではなく、過去無しだ」

説明を受け、美登理の眉が顰まる。瞳は斜め上にいく。

「あれ？ 過去無しつて過去の紙がないつてのでしょ？ 鳶人はそれを指す言葉じやなかつたつけ」

問い合わせに、トキはおもむろに落ちている木の枝を拾い、地面に四角を3つ描いた。そしてその中に、丸と三角とバツを一つずつ書き加える。

「それは正しいが、細分すりや、意味合いが違うくてな。鳶人つてのは鳶渡により生計を立てている奴を指すんだ。生計は立ててないにしろ、鳶渡を使う奴は鳶渡使いと称し、鳶渡の力はあるが使うことが出来ない奴を過去無しと分けている」

トントンとバツの印を枝で突き、「んで、シズクはここなんだ」と言った。

「力はあるのに使えないって……？」

説明の不足を補うために、トキは手に持つてある枝を撓らせた。

「鳶渡つてのは命に関わる事案が多いからな。それを鳶渡が上手く使えない奴が担うと……」

そこで一度区切り、枝をパキッと半分に折る。

「問題が発生しやすくなる。だから、上手く使えない奴は使用を禁じられている」

美登理は口を少し尖らせ、小さく連續して頭を縦に揺すつた。

「上手い下手とかあるんだ」

「ああ。過去をどれだけ遡れるのかとか、鳶渡を使用した際の時間のズレの大小とかな」

「へー、じゃあシズクさんは下手なの？」

「本人は気にしてないが、まあ……そうだな」

オブラーートに包んでいた頑張りを踏みにじり、その禁句を口にした美登理に、トキは気まずそうな顔をした。美登理はふーんと人差し指を頸に軽く刺した後、思い当たったのか、目をパチリと大きく開いた。

「ねえ。シズクさんとはどう知り合つたの？」

好奇心が先行している、稚拙な訊き方にトキは落胆のため息を吐いた。

「軽々しく言えるような話じゃねーぞ？」

棘のある声に、美登理は目を伏せた。

「あ……そなんだ」

「……悲劇を通つて出逢つたからな」

手元に置いている紙ぐずを、トキは拾い上げ、クシャリと潰した。

「聞いてみたい……かな」

それでも引かない美登理。トキはその背景とシズクとを混合させ想像し、諦めたように口を開いた。

「……11年前の話だ」

それは、雄大な山で起きた、悲劇であった。

その時シズクは13の少女で、母、サトミと山を登っていた時の

」と。

遙か前に夫と離婚をしたサトミは、女手一つでシズクを育ててきた。仕事でのストレスや、のし掛かる先々の不安などを、サトミは山を登り、景色を俯瞰することで吹き飛ばしていた。シズクもよく同行し、仲むつまじい親子であった。しかし、現実とは非情。そんな二人の間を、切り裂いたのだ。

山で起きる事故で最も多いもの。不注意で起こる、足の踏み外し。転倒や転落、滑落などである。影の多く降り注いでいた山道の草に残っていた水気により、サトミは足を滑らせ、高さ数十mはある崖下に滑落した。その光景を見ていたシズクは、すぐさま落ちた母を助けようと思いはするが、自身では何も出来ないことを受け入れ、助けを求めた。しかし、貧しい生活が更なる不幸を呼ぶのか、携帯を持たないシズクに架せられたのは、山を下って人を呼ぶという残酷なもの。

母の容態も分からぬまま、満身創痍で山を降り、ある大きな民家の戸を叩いた。その民家に掛かっている古びた表札には、『無代』と彫つてあった。

呼び掛けに応じたのは、無精髭を生やした40代ほどの太身の男であつた。男は玄関を半分だけ開き尋ねる。

「どうした？」

シズクは問い合わせられると、荒れた息の中で助けて下さいと求めた。男が眉を顰める中、さらに後ろから若い男の声が入る。

「ゲン、どうしたんだ」

名を呼ばれた太身の男は肩越しに応える。

「ああ、トキ。なんかこの嬢ちゃんが助けてくれってよ」

トキはトッタツタツという足音を鳴らし、玄関を全開にする。

「何があつたんだ？」

「おか……ハア……ハア……お母さんが……山で落ちて……」

全身に汗を滴らせ、膝に手を突き、肩で息を出入りさせるシズクは、今にも倒れてしまいそうだった。

「嬢ちゃんは運がいいな」

とゲンが言つた。「え？」とシズクは問う。

ゲンは得意な顔をして、

「話は後だ。嬢ちゃん、事故が起きる前のことを思い浮かべると急いで命令する。一切の説明もされないまま促されたシズクは当然、何のことだか解らない。」

「あ……の」

心配の波が不安を増長させる。

「いいから。思い出せ。早く！」

怒鳴られ、シズクは怯えながら、トキを見た。

トキは「クリ」と頷いた。大丈夫と告げたのだ。シズクは不思議がりながらも振り返る。

「いいか？ 印象強い？ 落ちた時？ ではなく、その前だぞ」

「……。は……はい」

答えた直後、ゲンはシズクの頭に触れた。

そして

⋮

「…… ゲンは驚愕した。過去が見れないからな」

重く圧し掛かるような話に固唾を飲んでいた美登理は気付く。

「あ……シズクさんは過去無しだから……」

「ああ。……結局、シズクの母親は助けられなかつた」

トキは敢えて言わずにいたが、シズクの母親は、鷺渡を使えたとしても、助けることは出来なかつた。何故ならシズクが山を駆け下りている間に、絶命してしまつていたからだ。

「その後、身寄りの無いシズクは俺ら（無代家）の所で預かる」とになつた。過去無しつてのが有効性を見出していたからな

「あれ、でもシズクさんつて鉢代つて苗字じやなかつたつけ」

「ん。後から鉢代んところが引き取るつて言い出してな。男臭いとこよりはまあしだらうつて事で預け渡した」

「鉢代家とあんたのところはどういう間柄なの？」

率直な疑問を美登里はトキに尋ねた。

それに対してもトキは開口するが、「代々、鳶人が集う御三家なのよ。鉢代家、無代家、そして从代家はね」と答えたのは、後ろからわざわざ美登里とトキの間に割つて入ってきたシズクであった。

美登里は図々しいながらも懇切丁寧な言い方に戸惑つた。

「あ、そ、そうなんですか」

不慣れな対応を気にせず、シズクはニッコリと笑みを見せるや否や、「そういえば」とトキの方を向いた。嫌な感じが美登里に微量に流れた。

「トキに話があったのよ

「話つてなんだ？」

「野々垣の件について、謝罪したかったの」

ピクリとトキの動きの一切が止まる。そして氣にならないほど長い時間の間に立て直し、動き出す。

「……俺は別にそんなモン要求しちゃいないぞ」

「でも、不快にさせてしまったのは事実でしょ

「……」

「じめんなさい。言葉だけで足りないのなら、出来るることはする覚悟よ」

真剣身を帯びる姿に、美登里は少し頬を染めて「うがう」と小さな奇声を上げた。

トキは黙つてシズクを見つめ、「恥ずかしそう」「……なら、頬もうかな」と言った。妙な期待を胸に秘め、シズクは「何かしら？」と次を促す。

「『ハ』拾い、手伝ってくれ

即答された要求に、シズクは何秒間か固まつた後、思い出すようになり、口を開いた。

「……………分かつたわ」

ヒューという風音と共に、色づいた街路樹の葉が落ちた。シズクの淡い想いは可燃になるのか不燃になるのか。分別する者は、なかなかどうして無関心である。

清掃するに当たって、スーツでは動きにくく上に汚れが気になるという名目の下、シズクはそこら近所で見合つた服を見繕つてくると公園を離れた。

一行は場所を変え、道路の側溝の掃除に取り掛かった。

娘の手を汚させまいと、富路は張り切る。しかし、普段から行わない掃除に不慣れさは隠せず、作業速度は周りの者が苛立ちを覚えるほどに、遅々としたものだった。

だが、美登理はその姿を哀れだと思わない。

汗を垂らす姿に感じる思いは、まだ何とも言えぬモノだが、頑張れ。と応援したくなるものであった。

力チカチと空回りする火バサミの音を聞きながら、美登理はトキと話を始める。

「そういえば、シズクさんつて悲しい過去があるのに、暗そうなイメージないよね」

トキはポリポリと側頭部を搔いた。

美登理にも悲しい過去がある。奇しくも、シズクと同じく、母親を亡くしている。美登理はその影響から、自殺を図った。そのような悲愴を背負う者からすれば、シズクは明るい印象に感じるようであつた。

「…あいつは強い奴だからな」

乾いた笑みから発せられた言葉に、美登理は不信感を抱きつつ、鸚鵡返しをする。

「強いつて?」

「さつき話したとおり、シズクは最初、無代家が預かっていた

シズクは無代家の大広間で正座をし、前に座する莊厳且つ朴訥な老人を見据えていた。

老人の名は無代 カンゴ。

この時、歳は七七を刻んでいた。白い髪に長く伸びた白い鬚。シワは切りがない程に蔓延つており、顔や身体に肉や脂がなく、渴いたよう。枯れ木と称せられる老人であった。

カンゴはシズクを見て、嬉しそうにシワを上げた。

「堅くなさらんで良い。この家は今やそなたの家でもあるのじゃ。気を楽に過ごしなさい」

これは、母親の死去という壮絶な体験をした者への配慮である。

だが、シズクはその優しさを受け入れなかつた。

「私に、仕事を与えて下さ。家事でも雑用でも重労働でも、何でもします」

真剣な眼差しの中、深く深く頭を下げられ、カンゴは痛々しい田をする。そして数秒後、重苦しく、言いたくもない言葉を口にする。

「……トキ。何か、シズクにさせてやりなさい」

萎縮し、籠つているだけでは、気は紛れぬのかもしれない。そう、カンゴは一番にシズクを思ひやる。

傍らで拝聴していたトキは、「分かった」と答え、シズクを連れて行つた。

カンゴは髪を一撫でし、「強い娘じゃ……」と虚しく呟いた。

それからシズクは炊事洗濯、風呂掃除など、多くの仕事をこなしていき、さらにさらにと求めていった。汗を流さない日など無いまま、ひと月が流れた。

忙しない日々により、無理が祟つたのか、シズクは風邪を拗らせた。

カンゴやゲン、そしてトキが心配そうに布団に伏すシズクを見つめる。

「何故、こうなるまで無理をさせたんじゃ」

カンゴが言うと、ゲンが眉を吊り上げた。

「向こうからやりたいやりたい言つてくんだから、止められないだ

る」

トキは苦しそうにするシズクを見ながら言つ。

「まだ、俺らに対する接し方が解らないから、居場所を作るのに無理したんじゃないかな。何もせずより、何かしていった方が気は紛れるし、時間も潰せるから」

シズクは眠つているにも関わらず、涙声で、「ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい」と、何度も何度も繰り返した。

聞いていた者たちの胸に、酷い鈍痛が走る。

ゲンはシズクの額から熱氣を帯びたタオルを取り、新しい濡れタオルを丁寧に乗せる。

「気にすんな。… 気にすんな」

宥めても意味は無いだろう。そんな思いは募るが、ゲンの言葉は、カンゴやトキも思い至る、本心であった。

その後、半月が過ぎ、鉢代家の者が無代家を訪問し、提案を出した。

「我々のところで引き取らせて頂くのはどうでしょうか」

カンゴは頭を横に振る術を持つていなかつた。この場に留まらせついても、シズクの肩の荷は何一つ落ちない。

そうして、シズクは鉢代家に引き取られた。が、ふた月後に、悪報が無代家に言い渡される。

それは、「一向に甘えてくれない」という、ある種の贅沢な悩み。真面目で、要領よく働いてくれるのは有り難いが、いつも堅く、心を閉ざしている。もっと恣意的になつて貰えないだろうか。やはり、悩みの種は、シズクの心。

誰もシズクを責めていない。寧ろ、シズク自身が口を傷付けているようであつた。

そこでトキたちは気付いた。

シズクは女手一つで育てられた身の上。

母親に樂をさせたい気持ちを力に変え、家事をし、心配を掛けまいがために、甘えを捨て、強く生きてきたのではないかと。特に母親以外の者に対し、邪推してしまっているのが辛辣なところ。

原因は恐らく、別れた父親。そして、ちらり、己自身。

鳶渡の力を知つて、初めて自分が過去無しであることを知り、そのせいで母親は、間に合わなかつたのだといつ局地的考えが、シズクを縛り付けていた。

能動的な思考の原動力は、深い深い悲しみ。しかし、屈しなさい。弱音も涙も零しはしない。

ただ強く。身を焼いてでもただ強く、シズクは在り続けようとする。

悲の波に飲み込まれ、怯懦を甘受するような生き方を、何としても許しはしない。

そんなシズクの確固たる意志。その跳ね返りが、他の【優しさ】を跳ね除けた。

「このままでは、シズクの身が持たない。

トキはそう察し、ある詞をシズクの前で落とした。

「お前、強く生きようとしてるけど、諦めちゃいないか？ 鳶渡の使えぬ自分に出来ることは、雑用ぐらいだと。諦めてるだろ。本当に強く生きたいなら、もつと摸索してみる。過去無しだからこそこそ出来る、役立つてのを」

「この詞は、模索の間くらい休めという意味と、本当に生きていくたいなら、己の手で生きてみるという意味が隠されていた。

シズクはそれらの意味を正確には読み取ることは出来なかつたが、感銘を受けた。その通りだつたからだ。いくら強く生きよつとも、この生活は人の金によつて成り得ているもの。

シズクは考えた。自分に出来ることを。

そうして幾年が経ち、出た答えは、【紹介人】。

「斯して、今のシズクが出来上がった。今はもうあの頃が懐かしいくらいに自由に行動してる」

トキは過去を顧みながら、懐かしい表情をさせた。美登理はシズクの心の圧迫感を親身になつて感じ取れるため、同情とは言わないまでも、親近感を抱く。それと尊敬を秘める。

「すういなー…。恐ろしいくらい、強い女性^{ひと}」

両手全ての指先同士を合わせる。その円の間を、側溝の水の上を滑るアメンボが、ゆっくりと通過する。

「ま、ちょっと特殊な奴だな」

トキはそう言い、ニヤリと笑みを見せる。

「まあ、鳥子もやつただけどな

「え？」

美登理は予想外な顔をする。トキは膝を伸ばし、『ミミ袋を開いて見せる富路。中提げて歩いていった。その姿を見つめ、「そつかなー…」と呟き、同じく立ち上がる。向かう先は、父親のもと。

「美登理、大量だぞ！」

少年のような笑顔を浮かべながら『ミミ袋を開いて見せる富路。中身は当然「ゴミだらけ。ヘドロに塗れたペットボトルや空き缶など。

「なんてモンを嬉しそうに見せてんのよ」

倦厭した表情をしながらも、どこか楽しげな美登理。そんな関係の糸を築いた者は、口の端を持ち上げた。すると、前の方から、「お待たせ」と声を掛けられる。

「お

声に気付いたトキは前を見る。そこに居るのは想像せずとも把握できる。

「シズ……」

名を呼ばうとする間際、思考に割り込んできた、その姿。

日差しが強いわけでもないのに麦わら帽子にサングラス。口にはマスク。寒いわけでもないのに、首まで隠れる長袖に、一重につけた軍手。ズボンの裾は長靴の中に仕舞われ、手にはゴミ袋と火バサミとウェットティッシュの入った箱が持たれていた。

見れば見るほど怪しい姿。

「誰だ？」

トキは後退りという警戒態勢を布く。

「あら？ 私よ？ シズク」

怪しい者は頭をコテンと愛嬌よく倒す。

それを田の当たりにする者の中に芽生える失望感。喪失感。

トキは片手を横に振り、衷心を伝える。

「いや、それはないわ……」

カシャン…ゴトッ…パサ…

そんな音と共に、火バサミとウェットティッシュ箱とゴミ袋が、虚しく落ちた。

第陸話【嘶の華】

雨の降り注ぐ夜空。最寄り駅が10数キロという場所にある会社。口クに金にもならない残業をした始末が、この天気予報の大はずれつぱり。

「タクシー…通らないかな」

会社の前の道路を見ながら、男は膝を折ってカバンに肘を置いた。 プツプー

「ん?」

顔を伏せたと同時に、クラクションの音が響いた。男が前を向くと、そこにはタクシーが一台止まっていた。

助手席のウインドウが開いて、奥から歳の取った声が通る。

「傘、持つてないんですか。どうです、乗りますか?」

進められ、男は「乗ります!」と清清しく言つた。乗り込む前に、キロ単位の値段を見てみる。

「…?」

初乗り共に無料と書かれていた。怪しさが男の中で募る。

「無料?」

「ええ。無料です」

「代わりに命を!…とか言います?」

「そんな物騒なことは言いません。ただ、代わりに話をしてもいいたいですね」

老人の言葉に、男の眉が顰まる。

「話?」

「ええ。愉快な話がいいですね」

* * *

その日の深夜の美登理のアパートは、珍しく賑わっていた。

104号室にだけ灯りが点いていて、ガヤガヤと小つるさい音の発生地を示していた。

中を覗けば、四人の男がコタツを四方に囲っていた。床にはビールの缶やチューハイの缶がゴロゴロと。灰皿は埋もれるほどに煙草が突き刺さっている。天板には緑色をしたシーツと、一摘み出される大きさの麻雀牌がズラリと。それと中央に赤や黒の斑点のついた細長い白い点棒。彼らは麻雀を楽しんでいた。

「じゃ、リーチといきますかね」

トキは1000点棒を指先で摘まんで卓上に投げた。
それを見て、他3人が息を呑む。

現在トップは牧元という骨格の細い中年の男。次点にトキ。3位に比村という爪楊枝を嗜んでいる中肉中背の男。下位に衣川という中年太りの象徴形の男がいる。

3人はトキの河をじっくりと見つめ、身長に手牌から安牌を河に放っていく。しかし、トキが牌を掴むと、卓上に快音を鳴らし、強打した。

「ツモ！ メンタンピン一発ツモで4000・2000ですか

カーッ！ と3人が嘆く。

「オーラスで逆転されつかー」

牧元は悔しそうに手牌を倒した。

「まさか引けるとは思ってなかつた」

トキは謙遜しながらも、ちゃっかりと点棒を貪った。

ジャラジャラと勝負は再開され、場は進む。

南1局目となつた時、順位はトキ、牧元、比村、衣川と、前回と似たようなものとなつていた。

「うーん、負けが込んできた……」

最下位の衣川は自分の持ち点（1300点）を見つめ、溜息を吐く。

「誰かおっしゃを元気付ける面白い話してえな」

悪い流れを無理やり変えるべく、衣川は話を振る。爪楊枝を噛んでいる男、比村は思い至ったのか、口を開いた。

「そ、言えば、面白いかはさて置き、珍妙な話なら先日聞いたな」「首位にいるトキは上機嫌に『ほお、聞かせてやれ聞かせてやれ』と促した。

「なんでも、無料タクシーってのがこの町のどつかに走ってるらしいんよ」

「無料？ そりゃ景気がいいねー」

と衣川が笑いながら言った。

「タクシー会社のイベントか何かか？」

と牧元が言った。

「にしても無料はちょっとやりすぎじゃないか？」

とトキが言った。

比村はさらりと補足を加える。

「そりゃ会社ぐるみで無料は無茶やわ。今のタクシー会社は危機に瀕しているからね。……個人タクシーラしいよ」

話に興味が湧き出したトキは、「しかし無料ってのは何かしらの裏があるのか？」と深いところを尋ねる。

「そういうことやわ。何でも、無料にする代わりに『面白い話』をして欲しい…だとよ」

比村は眉を吊り上げ、「暢気なもんだよ」と感想を一つ加えた。「なつはつは。なんだそりや。話のネタ集めにけつたいなモン走らせでんのかい」

牧元は大口を開いて笑い飛ばした。

トキは天板に頬杖を付き、「世の中には変わったことあるモンが居るんだなあ」と関心を深めた。

衣川は、「おっしゃの専属ドライバーになればええのに」と一言。

皆が笑つた。そして口を揃えて、

「あんた面白い話、持つてないだる」

と蛮声を浴びせた。

衣川は泣いた。そりやもうシヨンとした。そして打牌を比村に放銃された。顔に影が降りた。もう、持ち点は後1000点。諧謔を弄した男の末路はぶつ飛びしかないのか。

力チャヤリ。

そんな中、ひつそりと開く玄関扉。皆が一斉に視点を移動させる。深夜の時間帯のせいか、妙な怖々しさに包み込まれる。

そこから姿を現す者。超が付くほど不機嫌な顔をした、大家、美登理であった。

「あんたたち、こんな夜更けに大声で何してんのよ……」

騒音を優に超える美登理の大音声。4人は「うわあ……」と嘆いた。

美登理はズカズカと上がり込みながら、

「ていうか何なのよこの部屋！ 生活用品が何一つないじゃない！」
と、辺りを睨み回る。

トキは煙草に火を点して答える。

「ここは麻雀用の部屋だよ。俺が借りてる
「はあ？ あんたの部屋は105号室でしょ」

「いや、鳥子。まさか部屋の管理表とか見てないのか？」
「まだ一度も」

えつへんと美登理は威張つて腰に手を当てた。それを見た4人は

「おいおい……」と口を揃えた。

「……俺は105号室と、その両隣を借りてんだよ

トントンと灰皿に灰を落としつつ、話を補完する。

「106号室も？」

「ああ。理由は察しろ」

理由は言つまでもなく、鳶渡が関わっている。

「ふーん」

と、美登理は意を察し、簡素な相槌を打つた。

「いやーしかし何とも可愛らしい大家だねー」

比村は美登理をまじまじと見つめ、頬を染めて下卑た笑い方をする。全面同意の牧元はうんうんと頷きながら、「確かにな。古谷のババアとは大違い。正に月とすっぽん。すっぽんと云つてもトイレ（ラバー・カップ）の方だがな」と元大家、古谷に対し、罵声を浴びせた。

「良かつたなー鳥子。ほらほら、サービスしなきゃだ。脱げ脱げ！と、酒によつて陶酔しているトキは、下品に物事を言つてしまつた。

その時の美登理の眼は印象的で、まるで生ゴリを見ているような、何の感情も伴つていない、恐ろしく沈んだものであった。

トキはしまつた。と一瞬にして酒の気が抜けた。

美登理の表情は先ほどとは真逆の明るいものとなつた。生き生きとしたそれは、激昂の彼方を一周した者が啓ける顔。

「いつへん、死んでみる？」

衣川は無言のままトキへの手向けとして、胸の前で十字を切つた。

「さー…つて、仕切りなおしますか…」

頭頂部から湯気を上げるたん瘤の痛みに耐えながら、トキは麻雀を再開させた。他3人は氣の毒そうな顔をしながら牌を混ぜる。が、玄関扉が豪快に開いた。

「つるさいつてんのよー 私は明日も学校があるんだからー」

美登理はトキたちに剣突を食らわせ、バンッと扉を閉めた。

「……またにしますか」

トキはゆづくとそう言ひ、3人は「それがいい」と同調した。
くしゃくしゃと灰皿に煙草を押し付けながら、トキは「そんじや、
次は三日後にしやしょうか」と話を進める。そうすると衣川は思
出すように、「あー…その日はおっちゃん、用事があるなー」と答える。

「きーちゃん（衣川の愛称）。また娘と会うんかい。ホント、未練が
ましこなー」

と比村が言つた。

衣川は腕を組んで、口をへの字に曲げる。

「未練がましいやううど、自分の娘ゆうんは大切なんや」「
そう断言され、比村は頭を搔き、トキは口の端を持ち上げる。
「いいことじやねえか。生き甲斐があるってことさ、それだけで力
が溢れるからな」

「しつかし。面子が足りないぞ。どうするんだよ？」

牧元が言つと、トキはうーんと眉を寄せた。

「ん。シズク……でも呼ぶかな」

比村と牧元は顔を青ざめさせた。

「あの、鬼の娘か…」

4人は104号室を後にして、各自の部屋へと戻つていった。
トキは自室の中で煙草に火を点し、「無料タクシー…ねえ」と呟
いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7051w/>

鳶渡の時

2011年11月24日18時46分発行